

レアオ島のマラエ

新田栄治

Marae on Reao atoll, Tuamotu archipelago, French Polynesia

Eiji NITTA*

Abstract

I made a general survey and excavated *marae* on Reao atoll, Tuamotu archipelago, French Polynesia from July to October 1980 under the title, "A study of the Polynesian migration to the eastern Tuamotus." I undertook surveys of forty *marae* and excavated a *marae* complex composed of four different types at Akautapapatua. The primary aim was to obtain data for typology and to study the origin of *marae* on Reao. The results of the present study are as follows.

On Reao, there are fifty *marae* at thirty-six locations which can be classified into two main types, Type A (without wall) and Type B (with wall). Type A is divided into six subtypes and Type B into five subtypes.

Type A

A-0: Some small *ahu* in line.

A-1: *Ahu* without a small *ahu* and a small platform.

A-2: *Ahu* with a small platform at the center of the court.

A-3: *Ahu* with attached small *ahu*.

A-4: *Ahu* with detached small *ahu* and / or small box.

A-5: Stepped *ahu* with small *ahu* and / or small box.

Type B

B-2: *Ahu* with a small platform at the center of the court.

B-3: *Ahu* with attached small *ahu*.

B-4: *Ahu* with detached small *ahu* and / or small box.

B-5: Stepped *ahu* with small *ahu* and / or small box.

B-6: *Marae* enclosed with the wall.

Type A-0 is the oldest on Reao, and also remains on Fangatau and Fakahina in the central Tuamotu, so the first *marae* on Reao seems to have been introduced from those islands. After the introduction, *marae* developed independently on Reao year after year. Type B was made after Type A-1 and then those two types developed side by side.

Type B-6 seems to have its origin in the western Tuamotu and Cook Islands because *marae* like Type B-6 on Reao commonly remain in those islands, such as Rangiroa, Takapoto and Takaroa in the western Tuamotu, and Raivavae in Cook Islands. So, *marae* on Reao have at least two other origins and diffusional routes.

But it is too difficult to determine the chronology absolutely.

On the ceremonies at *marae*, archaeological research has shown that a ceremony of offering turtles was celebrated at *marae* and has made it clear how this ceremony was performed.

レアオ島は西経 136° 20', 南緯 18° 30', タヒチの東方約 1500 km のところに浮ぶツアモツ群島最東端の典型的隆起環礁である¹⁾。ここからさらに東方に向うと「地球のへソ」、イースター島がある。周囲はすべて南太平洋の風濤の世界で、視界には空と海と水平線があるだけである。レアオは北西から南東に細長く伸びており、全長約 20 km, 最大幅 4 km であるが、内側に大きな礁湖をもつため、陸地面積はきわめて小さい。広いところで幅 800 m くらい、狭いところでは 100 m にも満たない陸地が環状にめぐる北東部(トケラウ)と、クリークで断たれた 100 を越える小島(モツ)が点々と連なる南西部(ケレテキ)から成っている。外洋と礁湖とを結ぶパスがないため、独特の生態系を構成している。年平均気温は 25°C で 8 月の年平均雨量は 72 mm, 典型的な熱帯性気候である。東風が強く、そのためいくぶん不快感がいやされる。島内には唯一の現金収入の途であるココヤシが植えられているほかには植物としてはパンダナス、ミキミキ、その他の小灌木が植えている程度である。食用としうる魚貝類は礁湖内、外洋サンゴ礁の相方に棲息する類いのほとんどが毒性プランクトンによる汚染によって毒をもち、食べることができない。現在、食べることのできるものは外洋性回遊魚、ごく一部のリーフ性の魚、イセエビ、タコくらいである。生活環境はきわめて厳しい。現在(1980 年 9 月)住民は 53 世帯、230 人で、そのほとんどは島の北西端、タプアラヴァ(Tapuarava)に住んでいる。島外との交通手段は不定期に來航するコプラ買付船のほかにはフランス軍の軍艦・軍用機のみである²⁾。

2 か月半に及ぶレアオでの調査³⁾においてはマラエ(marae)、カウアイ(kauai)、居住址・調理場址、貝斧製作場址、墓を調査、その一部を発掘した。本稿においてはマラエについて、その調査の成果と若干の考察を記することにする。

1. マラエとは

マラエとはポリネシアの祭祀遺跡である。とりわけ、ソサエティ諸島、ツアモツ群島、マルケサス諸島に典型的にみられるもので⁴⁾、火山島であれば玄武岩などの火山岩で、隆起サンゴ礁であればサンゴを使って構築した方形の祭壇(アフ ahu, プラットフォーム platform), 板状石を立てた立石(アップライト upright)があり、その前面に前庭(コート court)が広がり、アフ前面やコート内に背もたれ状の板石の付いた椅子に似た形をしたり、小形プラットフォームであったりする小付属施設がある。マラエに類する祭祀遺跡は北はハワイ諸島の孤島、ネッカー Necker 島、南はニュー・ジーランドのチャサム Chatham 島、西はサモア⁵⁾、東はイースター島にわたるポリネシアの広大な海域に分布している。したがって、おのずと島々あるいはグループによって多種多様の形態を呈しており、同一

※ Associate Professor.

Center for Historical Studies, College of Liberal Arts, Kagoshima University.
鹿児島大学教養部歴史学研究室

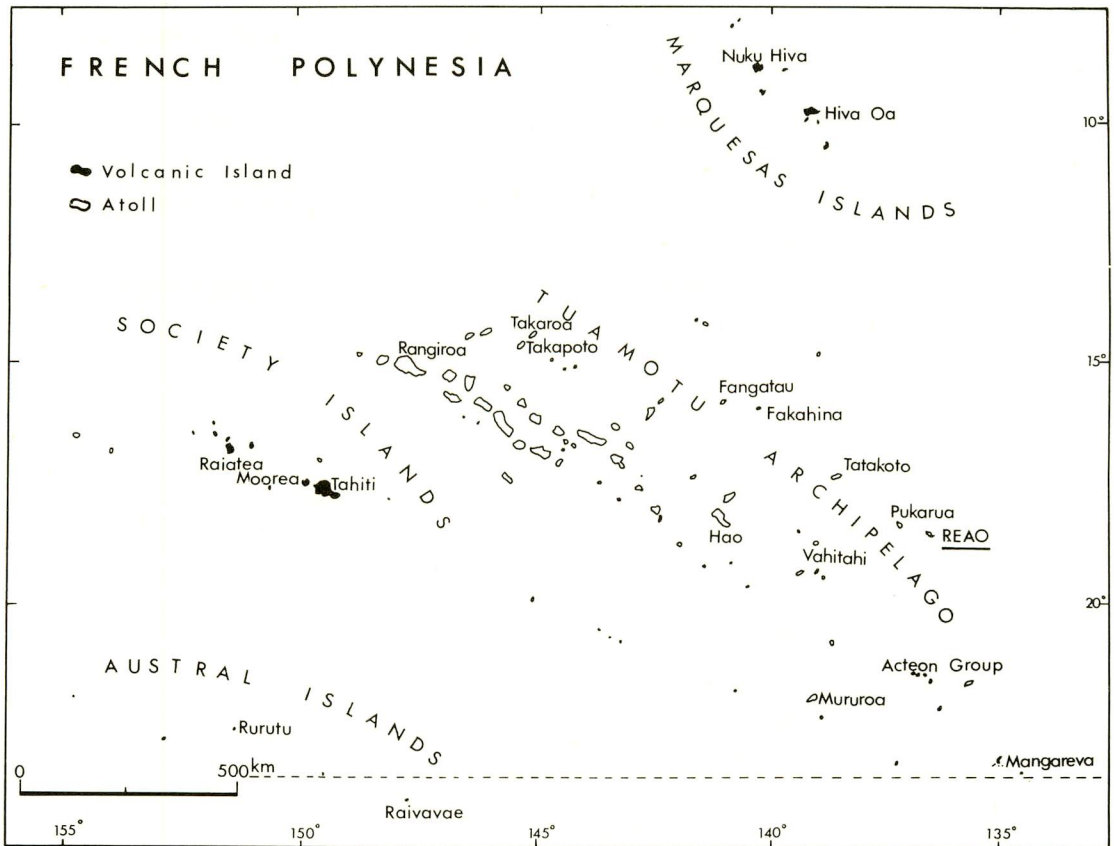


Fig. 1. French Polynesia and Reao Atoll

島内においても各種のマラエが構築されている。このようなマラエの多様性をどのように理解するかについては、エモリー氏による地域性と時間差を重視する考え方⁶⁾に対して、築造者あるいは集団の階層性を重視するグリーン氏の考え方⁷⁾がある。

レアオにおいては38地区において50のマラエがあるが⁸⁾、レアオ型と一括していわれているとはいえ、実態はきわめて多様であり、簡単には整理できない。後述するように、アカウタパパトゥアの4基のマラエから成るマラエ・コンプレクスは明らかに時間を追って構築されたマラエの集合体であり、時間差があることは明白である。同時に形態的多様性も大きく、時間差以外の要素が形態、規模等に反映されているともみられるのである。

レアオにおけるマラエの編年と系統についての展望をながめていこう。

2. レアオのマラエ

レアオのマラエは筆者の調査したところによるば、30 地区に 41 基が存在しており、エモリー氏⁹⁾、篠遠喜彦氏¹⁰⁾の調査結果と対照させて、筆者未調査・未確認のマラエ、および両氏未調査・未確認のマラエのうち存在が否定できるものとを相殺すれば、38 地区に総数 50 基のマラエがあるものと想定できる。

レアオの考古学的調査は 1929・30 年のビショップ博物館のポリネシア調査の一環としてのエモリー氏によるもの、1976 年の本プロジェクト第一次調査の篠遠喜彦氏によるもの、1978 年の飛行場建設に伴うジャジーヌ氏の 3 日間の緊急調査の 3 件があったにすぎないが¹¹⁾、3 氏ともに主要調査対象はマラエにあった。

レアオのマラエについてその概要を記す。リストおよびエモリー、篠遠両氏の番号との対照表は第 1 表のとおりである。

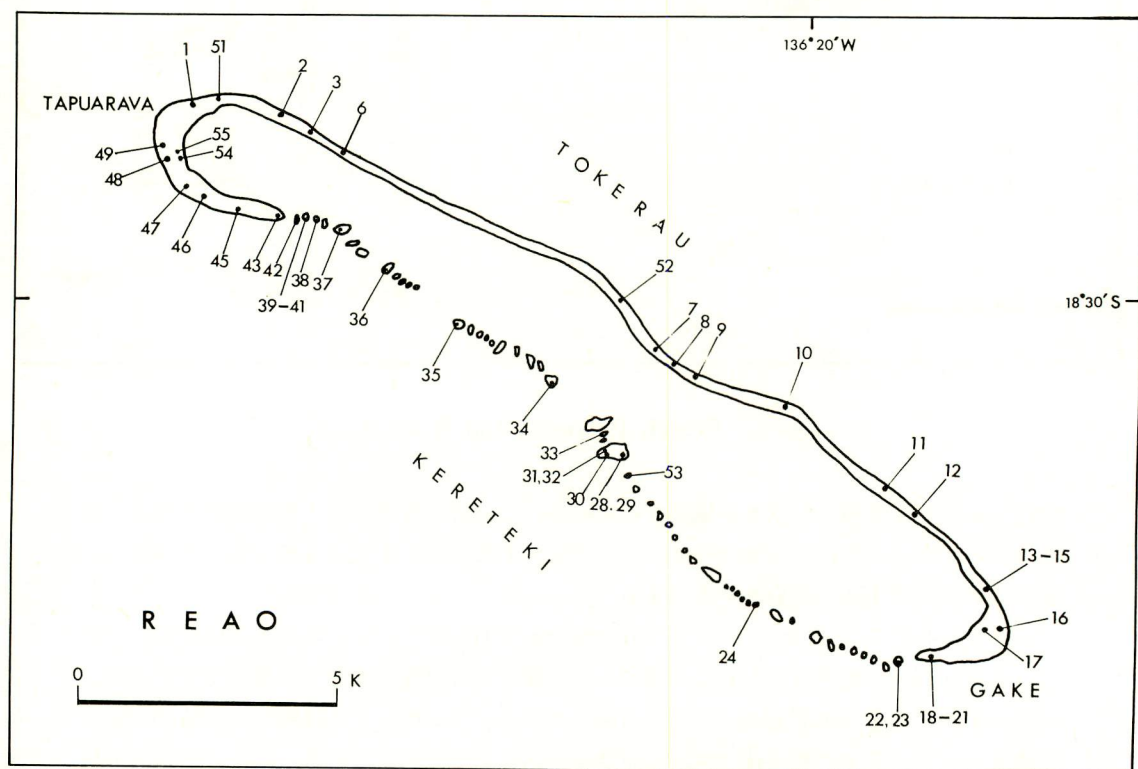


Fig. 2. Location of Marae and Religious Sites on Reao

Table. 1 LIST of MARAE on REAO ATOLL

No.	Name	Location	Emory's No.	Sinoto's No.
1	Hitianaunau	Near Tapuarava	1	1
2		Tepapauru	2	2
3		Tepahara	3	3
4		Tearatavaka	4	4
5		Tearatavaka	4	4
6		Near Aerodrome	Newly discovered	
7	Takiaka	Takiaka		39
8	Tohoranui	Tohoranui		38
9	Hitiagateata	Tapahara	5	5
10	Puarautoga	Kotuariki	6	6
11	Tevairaka	Gaharatapakia	7	7
12	Teragituatini	Fare pua	8	8
13		Kaihuaga	Newly discovered	
14		Kaihuaga	Newly discovered	
15		Kaihuaga	Newly discovered	
16	Temokotua	Tearero	9	9
17	Tearero	Tearero	10	10
18		Akautapapatua	Newly discovered	
19		Akautapapatua		11
20		Akautapapatua		11
21		Akautapapatua		11
22	Teapai	Tahanuga		52
23		Tahanuga		56
24		Hiva	12	12
25	Tepohatu	Pohatutaki ?	13	13
26		Mauorea	14	14
27		Turuturu	15	15
28		Pukamaru		43
29		Pukamaru		43
30		Pukamaru		44
31		Pukamaru		45
32		Pukamaru		46
33	Teapai	Teapai	16	16
34	Taukotuku	Taukotuku - uta	17	17
35		Kakararoa	18	18
36		Tearero	19	19
37		Maruga		55
38		Tokihuga	20?	
39		Puhara		42
40		Puhara		42
41		Puhara		
42		Paioa	30	
43	Tiave	Tiave	21	21

No.	Name	Location	Emory's No.	Sinoto's No.
44	Poamio		22	22
45	Maugatapu		23	23
46	Teteka		24	24
47	Manuatika		25	25
48	Heketini	Mohitu	26	26
49	Matatahi		27	27
50	Poureva	Tapuarava	28	28

LIST of RELIGIOUS STRUCTURES OTHER THAN MARAE

No.	Site Name	
51	Tatahua	A small ahu
52	Tepariga	A small ahu
53	Vekehara	Two small ahu, three uprights and small circle
54	Teaotua	Two coral slab structures like ahu
55	Tehiaro	One small box and one small backrest. Sinoto's miniature marae, No. 41

1 ヒティアナウナア Hitianaunau (第3図1)

村(Tapuarava)の東方近くの道路わきにある。主アフの崩壊が著しく、右小アフも道路によって一部が破壊されている。主アフの左に小ボックスがある。エモリー氏の調査時には左右に長60 m以上にも連なるウォールがあったが、現在はマラエ周辺部がココヤシの植林およびリーフに出る道路などにより完全に破壊・整地されており、全くその痕跡がない。コート内の小プラットフォームもない。主アフは最下段を長方形板状サンゴ(スラブ)を立てて並べることにより長方形を作り、その上に長方形スラブを平積みして、その内部にはサンゴ塊・サンゴ礫を充填して構築している¹²⁾。立石は現状ではないが、アフの前面・後面に転落した大形スラブがあるので、これらが立石であろう。小アフ、小ボックスも基本的には同様の構築法をとっている。エモリー氏によれば、アフ前面に低い段のある有段アフ(steppe ahu)であるとされているが、前面の崩壊が著しく確認できなかった。

2 テパパウル Tepapauru (第3図2)

レアオ飛行場滑走路のそばの外洋側にアフ主軸を礁湖岸と平行にして位置する。主アフは前面に小形の段をもつ。左右に小アフがある。左小アフの前面に現存3基の立石が立っており、主アフ前面には4枚のスラブで囲った小形ボックスが2基ある。コート中央にはスラブで囲み、内部に礫をつめた小プラットフォームがあるが、ウォールはない。アフエ上の立石は残存しない。マラエの現状は良好の部類に入る。

3 テパハラ Tepahara

滑走路建設のため破壊されることになったのを、シャジーヌ氏が空港待合所付近に移築・保存した。現状は当時の状態とは全く異なるので触れない。

4, 5 テアラタヴァカ Tearatavaka

エモリー氏の記録ではウォールを持ったマラエとその左に隣接するアフから成るマラエ

コンプレクスであるが、筆者の調査では確認することができなかった。

6 名称不詳。新発見。滑走路の東数百 m, 外洋側にあるもの (第3図3)。アフ主軸は礁湖岸と平行する。主アフは長 4.05 m の小形のマラエで、左右に小アフ、コート右側に小ボックスがある。主アフは最下段の囲みスラブと、その上部の2~3段の平積スラブを除いてほぼ完全に崩壊。主アフ左前面に大きなスラブが倒れており、立石と考えられる。アフ上の立石は現存しない。アフ前後に立石が倒れている。左小アフはスラブで囲み、内部に礫をつめる。右小アフも同様であるが、上面をスラブで蓋状に覆いをする。コート内の小プラットフォーム、ウォールはなく、コートは荒れている。アフの背後約 7.5 m に箱式石棺墓 1 基がある。

7 タキアカ Takiaka (第3図4)

外洋側に位置し、アフ前面は礁湖に向く。主アフの左右に小プラットフォームの痕跡がある。主アフ上面に立石の根元 1 基が残存するが、アフの前後に立石と考えられるスラブ 5 が倒れている。コート中央に背もたれをもつ小プラットフォームがあるがウォールはない。コートはサンゴ塊原であり整地されていない。

8 トホラヌイ Tohoranui (PL. 1-1)

主アフの右に 1 段低く作られた付属の小アフが接続する。立石は主アフに 5, 小アフに 2 の痕跡が認められる。コート内のプラットフォームは背の高い背もたれをもつ椅子形のもので、いわゆる「チーフの席」に似ている。ウォールの痕跡がある。アフの背後約 25m に箱式石棺墓が 1 基あった。

9 ヒティアンガテアタ Hitiagateata¹³⁾ (PL. 1-2)

地名は Tepahara ではなく Taramahiti であるかもしれない。レアオでももっとも複雑な構成をもったマラエのうちのひとつである。外洋側に位置し、アフは礁湖に向く。エモリー氏によって復元されているが、その後の時間とともにアフの崩壊が一部にみられる。主アフ前面に 2 段のステップが付属し、主アフ、ステップともに多数の立石が並ぶ。アフ左右には小アフが各 1 基あり、コート中央にも小プラットフォームがある。また長 50 m, 幅 1.5 m, 高 0.5 m のウォールがコートの左右にあり、左ウォール先端は円形の囲みを形成。今回、コート左先端部で小ボックス 1 基が発見され、シャジーヌ氏が発掘した。内部からは 300 点以上にのぼるカメ骨が出土した。

10 プアラウトンガ Puarautoga (PL. 2-1)

外洋側にあり、礁湖に向く。マラエの形態は複雑かつ特異である。主アフ後部中央で鍵手状に曲折し、アフの幅が左右で異なる。主アフの右前部にはステップ状の小アフが別個に付属する。またこの小アフの左に主アフ前面に接して小プラットフォーム 1 基が、主アフ左右に各 1 基の小アフがある。主アフ左前部に 2 基の墓が、背後に箱式石棺 1 基がある。コート中央には背もたれ付小プラットフォームが 1 基ある。コート左右には 45 m 以上の長さにわたるウォールがある。

11 テヴァイラカ Tevairaka (第3図5)

外洋側に位置し、礁湖に向く。主アフ上面に立石の接取痕が 9 個確認された。ほぼ等間隔で並ぶ。アフの左右にはスラブで方形に囲んだ小アフがある。左アフはスラブ上部にス

ラブを3段に平積みしており、主アフと同じ構築法である。コート中央に小プラットフォームがある。内部にはサンゴ礫をつめている。ウォールは左のみ存在する。シャコガイ貝殻を集積している。ウォールに対応するコート右側にサンゴ塊を積んで作った円形の囲みがある。奉納物収納用の円形囲みであったものと考えられる。

12 テランギトゥアティニ Teragituatini (第4図1)

外洋側に位置し、礁湖に向く。主アフの右にほぼ同形同大のボックスが3基、左に崩壊した小アフ1基がある。コート中央に小プラットフォームがある。エモリー氏の調査によればコート左右に円形囲みのあるウォールがあったとのことであるが、確認できなかった。またエモリー氏の図ではボックスの数等に誤りがある。¹⁴⁾

13 カイファンガ Kaihuaga

外洋側の荒涼としたサンゴ塊原にあり、アフは礁湖岸と平行に向く。スラブを立てて方形に囲った低い小形のアフがあり、その背面に3つの大形スラブを立石として立てる。その他の付属施設はない。いわゆる「西ツアモツ型」のマラエときわめて類似している。

14 カイファンガ Kaihuaga (第5図, PL. 3-1)

No. 13の東方約200mのところにある。レアオではきわめて特異なマラエである。アフは前面にステップを備え、主アフの高さも低い。上面はレアオ通有の小礫によらず、スラブによって覆っている。主アフ右側にスラブで覆いをした小アフ1基がある。コートは方形にスラブ、サンゴ塊によるウォールで囲繞され、ウォールに沿って立石が立てられる。右ウォール、アフよりにシャコガイ貝殻が堆積する。主アフに対するウォールの位置に小プラットフォームが、またその後面にスラブで覆ったボックスがあり、この部分のみ、ウォールが途切れ、別にウォールが作られている。また主アフ後方にウォールで方形に囲んだ小コート2が付属し、いずれも短辺側に背持たれ付ボックスが存在し、ウォール沿いに立石が並ぶ。コートの内部はすべてきれいに整地されている。このマラエの外側、外洋側に小形のアフ、立石等が多く散在している。

注目される遺構として、カイファンガの外洋に面した最も高い地に約2m弱四方、高1mくらいの、マラエのアフに類似した構築法による方形壇が数十m間隔で点々と並んでいるものがある(PL. 9-2)。カメがやって来るのを監視するための見張台であるといわれているが、真偽のほどは明らかでない。

15 カイファンガ Kaihuaga (PL. 3-2)

No. 14の東方100mほどのところにある小形のマラエである。構造的にはNo. 14を小形化したような形態を呈する。

カイファンガの3基のマラエはきわめて特異なあり方を示しており、その系統をうかがううえで重要な遺跡である。

16 テモコトゥア Temokotua (第4図2)

外洋側にあり、礁湖に向く。主アフ前面にステップがあるが、左右に分れている。左に小アフ1基があるがほぼ完全に崩壊。エモリー氏の図¹⁵⁾では2基となっているが前面の小アフは存在しなかった。コート中央に小プラットフォームがある。コート左右にサンゴ礁によるウォールがあり、ともにその中央にシャコガイ貝殻の集積がある。コートはきわめ

て良好に整地されている。

17 テアレロ Tearero

No. 16の南東約150 m、外洋と礁湖の中間に、礁湖に向いて位置する。ブッシュで完全に覆われており、発見が遅れたため、十分な調査はできなかった。大形の主アフが残存し、その左に長約4 m、幅1.2 mのスラブを立てて長方形に囲んだ小アフ痕跡があった。この小アフの前方約10 mの地点にカメ骨、ブタ骨多数が散在していたが、マラエとの関係については明らかにしえなかった。エモリー氏は完全に破壊されていたと記しているが、現実はそのではなく、主アフ、小アフが残存している。

18-21 アカウタパバトゥア Akautapapatua (第6図, 第7図, PL. 4)

地名が不明であったが、インフォーマント Nakunua により、Akautapapatua と判明。4基のマラエが同一地に継起的に築造されたマラエ・コンプレクスである。いずれも外洋側にあり、礁湖に向く。篠遠氏による略図があるが¹⁶⁾今回、この遺跡をマラエ編年の資料とするため、全面発掘を行ない(80×50 m)新たに1基のマラエを発見し、遺構等を詳細に記録することができた。また、カメを使った祭祀の実態を明らかとした。発掘調査については後述する。

22 テアパイ Teapai

筆者未調査。Sinoto 1978, p. 120, Fig. 10 B 参照。

23 タハヌンガ Tahanuga

筆者未調査。Sinoto 1978, p. 122, Fig. 10 B 参照。

24 ヒヴァ Hiva (第4図3)

モツ・ヒヴァの外洋側、礁湖に向く。主アフ上面に立石板取痕16が残っているが、立石は残存しない。立石らしいスラブが周囲に転落している。コート中央に小プラットフォームがある。コート左右にウォールがあり、左ウォールは主アフ後面に鍵状に曲る。右ウォールは主アフ前方で右に鍵状に曲る。ウォール先端は不明。エモリー氏の図¹⁷⁾はウォール形状が誤りである。

25 テポハトゥ Tepohatu

筆者未調査。エモリー氏によれば2基のアフと左右のウォール、および両アフの間を仕切る中央ウォールのある変った形のマラエである¹⁸⁾。

26 マウオレア Mauorea

筆者未調査。エモリー、篠遠両氏も未調査のため、存在も確認されていない。

27 トウルトゥル Turuturu

筆者未調査。エモリー、篠遠両氏とも未調査。

28 プカマル Pukamaru (篠遠氏の TuR 43, No. 2) (PL. 6-1)

モツ・プカマルの礁湖岸にある。アフ最下段のスラブを立てて長方形に囲んだ基壇部のみ残存し、上部は完全に消失。

29 プカマル (篠遠氏の TuR 43, No. 1)

No. 28の東に近接して築かれている。篠遠氏がトレンチおよび試掘坑を設定。アフ最下段の長方形に囲んだスラブのみ残存する。礁湖側にステップ状の施設が付属するので、礁

湖に向いていたものと考えられる。

30 プカマル (PL. 6-2)

モツ・ブカマルの外洋側に位置し、礁湖に向く。篠遠氏により復元されている。主アフの他には左右の小アフ、コートの小プラットフォーム等の付属施設はない。コート左右にウォールがあるが左ウォールは途中で切れて出入口状になる。コート内は整地されている。アフ上の立石は22である。

31, 32 プカマル

モツ・ブカマルの外洋側、No. 30の南西にある。ほぼ完全に破壊されたマラエで、アフの内部を充填していたサンゴ礫の堆積が残っているのみである。

インフォーマントからの情報によれば、レアオでも礁湖内の魚捕獲用のワナや捕った魚を貯えておく池を作るためにマラエのスラブを取り壊して用いたことがままあったとのことであり、プカマルのマラエもその例であろう。

33 テアバイ Teapai (第12図1, PL. 7-1)

モツ・テアバイの外洋側に礁湖に向かって築かれている。主アフ上には立石が1基残っているほか、立石の基部が折れて残ったものが1基あり、そのほかに立石と思われる大形スラブが9個、アフ上に倒れている。主アフ右にはサンゴ塊で円形に築いた堆積がある。またアフ左には大形スラブが地面に敷かれたように置いてあり、このスラブの下から約1 m 四方の範囲に焼かれて変形し、かつ小片となった人骨2体分が散乱していた。(第12図2, PL. 7-2) この人骨の中にサメ歯1点が置かれていた。サメ歯は大形のもので、あたかも奉獻品のようである。コート内には立石の基部現存2個をとどめた小プラットフォームがある。スラブで方形に囲みを作り、その上にスラブを平積している。コート左右には高さの高いウォールがある。また主アフの後方13 m、高1.5 mのサンゴ塊の堆積があって、テアバイでは主アフを三方から囲んだ形となっている。篠遠氏は後方のものを破壊されたアフとしているが、むしろウォールに構造的には酷似している。コート内は整地されている。

34 タウコトック Taukotuku (第13図1)

エモリー、篠遠両氏とも未調査。モツ・タウコトック・ウタの外洋側に礁湖に向かって築かれている。主アフはほとんど崩壊している。コート中央の小プラットフォームのほかに小アフ等はない。小プラットフォームも崩壊しているが、シャコガイ貝殻が置かれている。コート左右には長いウォールがある。左ウォールはアフ左にT字形のウォールがありその前方にさらに一直線に伸びるウォールがある。右ウォールは左ウォールより短く、左右不対称である。

35 カカラロア Kakararoa (第13図2, PL. 8-1)

モツ・カカラロアの外洋側に礁湖を向いて立つ。残存状態は良好。主アフの右側に低い小アフが接続している。主アフ上には立石は残存しないが、立石抜取痕が5個所にある。コート中央に小プラットフォームがある。スラブで上面を覆っている。ウォール、ボックス等はない。マラエ背後のサンゴ原には箱式石棺墓群があり、墓地となっている。

36 テアレロ Tearero (第13図4)

モツ・テアレロの外洋側に礁湖を向いて立つ。アフの残存状態は良好である。立石は中

央のものが1基のみ残っている。コート内に小プラットフォームがあるが崩壊している。コート左右にはウォールがある。左ウォールに対して右ウォールはアフとの間があき、さらに長く伸びる左右非対称である。

37 マルンガ **Maruga** (第13図3)

モツ・マルンガの外洋側にあり、礁湖に向いて立つ。ウォール、小アフ、小プラットフォームなどの付属施設は全くなく、主アフのみのマラエである。立石は残存していない。アフの右後方に箱式石棺墓1基がある。

38 トキフンガ **Tokihuga** (第13図5)

モツ・トキフンガの外洋側、礁湖に向って立つ。小アフ、小プラットフォーム、ウォールをもたない。主アフの前面、側面はスラブを美しく積み上げているが、後面は粗雑なサンゴ塊を積んでいる。アフ上の立石は残存しない。アフ前面左方に2つの立石が立っている。

39-41 プハラ **Puhara**

モツ・プハラの礁湖側に立地する。1976年、篠遠氏が発掘調査したマラエである。篠遠氏の報告¹⁹⁾を参照のこと。

プハラのマラエについて今回の調査時に情報を収集したところ、**Maretiale**と**Nakunua**の2人のインフォーマントより、彼らが子供のころにプハラのマラエも破壊して、そのスラブ等を魚のヤナや池を作るのに使ったという事実を明らかにすることができた。プハラのマラエの現状は最下段のスラブのみが残存するきわめて保存状態の悪いものであるが、その原因は上記のとおりである。

42 パイオア **Paioa** (第14図1)

モツ・パイオアの外洋側、礁湖に向って築かれている。大形サンゴ塊原の傾斜地である。エモリー、篠遠両氏とも未調査。主アフは長さのわりに高さが高い。アフ上の立石は残っていない。主アフの左右に小アフがある。コート中央にはスラブで方形に囲み、円部に礫をつめた小プラットフォームがある。ウォールはない。

43 ティアヴェ **Tiave**

モツ・ティアヴェのほぼ中間、南西岸のクリークに近いところに礁湖に向いて築かれている。アフ上には中央の立石1基のみが立っているが、折れて基部だけ残っているもの、立石と思われるスラブの倒れているものがある。エモリー氏によれば主アフには1段のステップがあるとのことであったが確認できなかった。アフ左に小アフが、コート内に小プラットフォームがあり、コート左右にウォールがある。

44 ポアミオ **Poamio**

筆者未調査。エモリー氏調査。

45 マウンガタブ **Maugatapu** (第14図2)

外洋側の平坦地に礁湖に向って立つ。主アフは前・側面に1段のステップをもつ。ステップ構築法もアフと同じく、内部に礫をつめる。アフは崩壊が著しいため詳細はよく判らないが、アフ上左に立石の基部1が残っている。コート中央に小プラットフォームがある。内部には礫がつめられていたと思われるが、現在はない。コート左右にウォールがある。右ウォールはヤシの植林によると考えられるが、ほぼ完全に破壊され、高さ10cmほど

の痕跡として残っているにすぎない。

46 テテカ Teteka (第14図3)

アフは崩壊が著しく、原形を知るのは困難である。アフ上面中央に立石抜取痕1個が認められた。付属の小アフはない。コート中央に小プラットフォームがあるがスラブは倒れており、礫のみである。コートはきれいに整地されている。左右にウォールがあるが、左ウォールはアフ側が鍵状に曲っている。

47 マヌアティカ Manuatika (第15図1)

外洋側にあり、礁湖に向く。CEP²⁰⁾ 旧施設に隣接する。残存状態は良好である。主アフはほとんど崩壊せずに残るが、アフ上面の立石は基部1個を除き全くない。立石抜取痕が22個確認された。おそらく、25基の立石が並んでいたものと推定される。エモリー氏の記録ではステップと左右の小アフがあるが、全く認められなかった。コート内には小プラットフォームがある。コート左右にウォールがある。左ウォールはアフ近くで鍵状に曲がる。末端近くに立石1基がアフ上に立つ。また末端のコート内にサンゴ塊を積み、馬蹄形の囲みを作る。右ウォールは両端が外方に曲る。コート内は整地されている。

48 ヘケティニ Heketini (第15図2, PL.8-2)

外洋側にあり、礁湖に向く。レオオで最大のマラエである。主アフは崩壊が著しいため構築の詳細はよく判らない。エモリー氏の記録では1段のステップが記されているが、筆者は認めえなかった。主アフ上面には立石は残っていないが、立石抜取痕が19、立石基部1部が現存する。おそらく、30前後の立石があったものと思われる。主アフの右には接続した小アフと別個の小アフ各1が、左に小アフと思われる礫の堆積がみられた。主アフの右後方に、より規模の小さなアフが築かれている。構造的には同じである。エモリー氏の記録には載っていない。コート内には小プラットフォームがある。コート左右にひじょうに長いウォールがある。いずれもアフ側で外方に広がる。マラエが築かれている場所は外洋に近いサンゴ塊原の傾斜地であるが、コート内部は極めて美しく整地されている。レオオのマラエの場合、ヘケティニに限らずコートが整っているが、コート内の大形サンゴ塊を左右のウォール構築の材料として使用し、同時にコート内の整地を行なったものと考えられる。なお、左ウォールにシャコガイ貝殻の堆積がある。

ヘケティニは1834年マンガレヴァに宣教団が到着した時に存命していたレオオの2人のアリキまたはカイト²¹⁾の1人、タイホプ(Taihopu)の居住地である。

49 マタタヒ Matatahi (第15図3)

外洋側に位置し、礁湖岸と平行に向く。主アフは崩壊が著しい。アフ後面もスラブで囲んでいるが、さらに外側に大きなサンゴ塊を立てる。アフの背後に立石と考えられる大形スラブが倒れているが、現状は立石の残存は皆無。また立石抜取痕も不明。コート内には小プラットフォームがある。コート内はきれいに整地されている。ウォールは見あたらないが、きわめて微かな高まりのサンゴ礫の列が左右にみられるので、あるいはウォールの痕跡かとも思われるが確言できない。

アフの右後方には少なくとも3基の箱式石棺墓が確認されたが、天井石の落ちたものもあり、保存状態は良くない。これらのうち、小形の石棺墓1基を発掘したが、人骨・副葬

品等は全く存在しなかった。

50 ポウレヴァ Poureva

現在の村のあるタブアラヴァにあったマラエで、カトリック教会の建設により消滅。エモリー氏来島のときはすでになかった。実態については全く不明。

レアオに存在する50基のマラエについて、その現状の概略を述べた。レアオには以上のマラエのほかに、マラエとは異なる宗教遺跡と考えられる小形の遺構が存在する。合せて、これらの遺跡について記す。

51 タタフア Tatahua

新発見の遺跡で外洋側のサンゴ塊原に位置する。2.2×0.8 mの小形のプラットフォームである。長軸は礁湖岸と直交。スラブを立てて囲み、その上にスラブを3段に平積し、内部には礫をつめる。周囲には全くなにもない。

52 テバリガ Tepariga (PL. 9-1)

外洋側のサンゴ塊原に位置する小形のプラットフォームである。周囲に箱式石棺墓5がある。新発見。

53 ヴェケハラ Vekehara

モツ・ヴェケハラの外洋側にある。ブッシュ内にあるため、詳細は不明。新発見。小形のプラットフォーム2、サンゴ塊による円形の囲み2、立石などがある。プラットフォームはスラブを立てて囲み、内部に礫をつめたただけのもので、平積スラブはない構造である。これらの北西約5 mに破壊された箱式石棺墓1基があった。

54 テアオトウア Taotua

礁湖岸に位置し、長軸は礁湖岸と平行する2基の小形プラットフォーム状の構築物である。新発見。地表にスラブ列が見られたのでマラエではないかとの予想からこれに直交するトレンチを2本設定して発掘を行なった。スラブで囲んだ構造物が明らかになったが、性格的にはマラエとはいえないが何らかの宗教的遺構と考えられるものである。少量のカメ骨、魚骨が出土したのみである。

55 テヒアロ Tehiaro

篠遠氏調査。No. 54の北約100 mにある小形のボックスと背もたれ付ボックスである。篠遠氏はミニアチュア・マラエとしたもの²²⁾。マラエとするには躊躇されるものであり、別個の宗教遺跡としておく。

以上のほかに、カイファンガのマラエ近隣に多くの小プラットフォーム、立石がある。これらはマラエとの複合体を成すものかと考えられる。

レアオの宗教遺跡には典型的なマラエと、マラエとは異なる小形のプラットフォーム、立石等をもった別種の宗教遺跡とが存在することが明らかとなった。

3. マラエの発掘

アカウタパパトゥアのマラエ・コンプレックスの発掘調査を行なった²³⁾。ここには複数のマラエが存在することからマラエの型式編年の資料が期待できること、当地はガケのカウアイ密集地に近く、マラエ周辺から調理場址が試掘堀によって確認され、食料生産の場と生活址

とマラエとの相互関係をセットとして把握し、人々の生活の総合的復原ができるのではないかと期待があったことなどの理由から調査地を選んだのである。

遺跡は外洋側の傾斜地にあり、全域が灌木で覆われており、マラエ構造物はほぼ完全に隠されていた。南北 50 m、東西 80 m の範囲を伐採・清掃し、全構造を露呈した。マラエは 4 基存在する。A 1～A 3 は南から北へ継起的に構築されたことが推定され、A 4 はこれらの東側にある。4 基のマラエは、その配置から A 1 から A 4 へと変遷していったと考えてよいであろう。A 1 の西方に A 1 とは方向を異にした小形のアフの基部が残っている遺構がある。別個の遺構と考えられる。

トレンチは T-I～VII の 7 つを設定した（第 7 図）。T-I は A 1 の構造を知ること、そのコート内の調査、北側に連なるサンゴ塊とシャコガイ貝殻堆積の性格を知るためである。T-II は A 1 の規模と構造を明らかにするため。T-III は A 4 のコート内の状態とコート中央のシャコガイ貝殻堆積の性格と、その下方の遺構の有無を確認するため。T-IV は A 3 のコート中央の小プラットフォームの規模を調べることと、タカロアでの調査体験²⁴⁾からコート内での祭祀の痕跡を予想して、その実態を明らかにするため。T-V はシャコガイ貝殻堆積がみられ、また、この部分に地表の高まりがあることから、遺構の存在が推定できたため。T-VI は A 1 と A 2 の先後関係を層位的に確認したく、また A 2 の主アフ付属施設の有無の確認するため。T-VII は A 3 アフの左ボックス内部の奉納品検出のため。以上の目的からトレンチを設定し発掘した。合せて、A 2 の左小アフの清掃、A 3 右小アフの発掘、A 4 左ボックスの発掘を行なった。発掘の結果は次のとおりである。

〔T-I〕層位は第 1 層が腐植を含む褐色砂で表層、第 2 層は明褐色砂の自然堆積層である。北端のサンゴ塊、シャコガイ貝殻の堆積は下部にスラブ等の立っているものではなく、崩壊したアフではなく、ウォール的なものである。この部分が地形傾斜の変換線となっており、段となっているため、一種のウォールとして積んだものと考えられた。コート内には散乱したスラブ、サンゴ塊があるのみ。

〔T-II〕A 1 の基段の立てて並べたスラブ列の検出をはかったが、ほとんど残存していなかった。そのため、A 1 の右側の規模を正確に知ることはできなかったが、わずかに残ったスラブから推定復原を行なうことができた。遺物はない。

〔T-III〕土層堆積は第 1 層が表土で腐植を含む褐色砂層、第 2 層は明褐色砂層である。第 3 層は枝状サンゴの礫層である。コート内には全く何も発見されなかった。シャコガイ貝殻堆積は地表にのみあり、その下部には遺構等はなかった。

〔T-IV〕土層堆積は同様。小プラットフォームはアフに面する側のスラブが 1 つだけ残っているが、ほぼ完全に崩壊して礫、サンゴ塊の堆積と化している。表土を除くと第 2 層より、多数のカメ骨、魚骨が小プラットフォームの周囲より検出された。特に注目されるのは、カメの頭骨とそれに連なる脊椎骨が頭部を主アフに向け、一列に横に並べられた状態で小プラットフォームの周囲から出土したことである。コート内での祭祀の実態を想定する重要な事実である。（第 8 図、PL. 5-1 Table 2）

〔T-V〕下部遺構はない。土層は第 1 層が腐植土、第 2 層が褐色土、第 3 層が明褐色砂である。第 2 層中からカメ骨（四肢骨、胸骨）が若干出土した。（第 9 図、Table 3）

Table. 2.

LIST of FINDS

T-IV

No.	Object	No.	Object
1	TB	28	TB (Skull, Backbone)
2	TB (Skull Backbone)	29	TB (Skull, Backbone)
3	TB	30	TB (Mandible, Backbone)
4	TB	31	TB
5	TB	32	TB
6	TB	33	FB
7	TB	34	TB
8	TB	35	Charcoal
9	TB	36	Charcoal
10	FB	37	TB (Backbone)
11	TB	38	TB
12	TB	39	TB
13	TB, FB	40	TB
14	TB	41	TB
15	FB	42	TB
16	FB	43	TB (Mandible)
17	Charcoal	44	TB (Longbone)
18	Charcole	45	TB (Mandible)
19	FB	46	TB
20	TB	47	TB
21	TB, FB	48	FB
22	TB	49	TB (Mandible, Backbone)
23	TB	50	FB
24	TB	51	TB
25	TB (Skull, Backbone)	52	TB (Backbone)
26	TB (Skull, Backbone)	53	FB
27	TB (Skull, Backbone)	54	TB

TB ; Turtle Bone

FB ; Fish Bone

Table. 3.

LIST of FINDS

T-V

No.	Layer	Object	No.	Layer	Object
1	S. 2	TB	8	S. 2	TB
2	S. 2	TB	9	S. 2	TB
3	S. 2	TB	10	S. 2	TB
4	S. 2	TB	11	S. 2	TB
5	S. 2	TB	12	S. 2	TB
6	1	TB	13	S. 2	TB
7	1	TB	14	S. 2	TB

No.	Layer	Object	No.	Layer
15	S. 2	TB	22	1
16	S. 2	TB	23	S. 2
17	S. 2	TB, FB	24	S. 2
18	S. 2	TB	25	1
19	S. 2	TB	26	1
20	S. 2	TB	27	1
21	S. 2	TB		

S. 2 ; Surface of 2nd layer

Table. 4. LIST of FINDS

T-VII

No.	Object	No.	Nn.	Object
1	TB	25		TB
2	TB	26		FB
3	TB	27		TB
4	TB	28		TB
5	TB	29		TB
6	FB	30		Tridacna Shell
7	Carapace	31		TB, FB
8	Harpoon	32		TB, FB
9	FB	33		TB
10	TB	34		TB, FB
11	TB	35		TB
12	TB	36		TB
13	TB	37		TB
14	TB	38		TB
15	TB	39		FB
16	TB	40		FB
17	TB	41		TB
18	TB	42		FB
19	TB	43		TB
20	TB	44		TB
21	TB	45		TB
22	Carapace	46		TB
23	TB	46		TB
24	TB	47		TB

〔T-VI〕倒れたスラブが散乱しているのみで、遺構等はない。A 1 と A 2 の層位関係も確認できなかった（第 11 図 4）。

〔T-VII〕左ボックスの内外を発掘。アフ内表土直下より骨製鉞先 1 点が出土した（第 10 図 2，PL. 5-2）ほか、アフ内の土中から、多量のカメ骨と若干の魚骨が出土した。出土したカメ骨には頭骨、脊椎骨は皆無で、四肢骨、胸骨、背甲に限られている。T-IV の

場合と好対照をなしている。(第10図1, Table 4)

次にマラエについて述べる。今回の調査ではマラエ構造物およびその周囲を清掃して、構造と遺物を明らかにすることができた。

〔A1〕現状はきわめて保存状態が悪く、アフ最下段の囲みのスラブが一部と、アフ内部を充填していた礫の一部が残っているにすぎない。立石も不明。このマラエは小規模のアフが少なくとも4基、横一列に並ぶ型式のものである。T-1内より、カメ骨小片が1個出土した。

〔A2〕A1の左前面にある。主アフは前面にステップをもつ。アフの崩壊が著しいため、アフ前面に崩壊したスラブ、立石、礫が大量に堆積しており、全容を明らかにできなかった。アフ上の立石は残っていない。主アフ左に小アフが接続する。これも囲みのスラブを除いて崩壊している。この内部から1点、後外部から2点のカメ四肢骨が検出された。(第11図1)。

〔A3〕主アフは最大である。アフは崩壊が著しい。上面には完存する立石1基のほか基部、痕跡5が現状では認められた。主アフ右にはボックスがある。ボックス内を発掘したが、2片の骨片が上層より検出されたのみで遺物は皆無である(第11図3)。左側にはボックスがある。後部の囲みスラブはないが側壁により推定。内外より、カメ骨、魚骨が出土したことについては既述のとおりである。主アフ前面中央より2片のカメ骨が検出された。

コート左右にはウォール状のスラブ、サンゴ塊とシャコガイ貝殻堆積が続いている。形態的にはレアオの他のマラエのウォールとは異なっているが、一種のウォールと考えてよいだろう。コート内には小プラットフォームがある。

〔A4〕コンプレクスのなかで、もっとも複雑な構成を示す。残存状態は他よりも良い。主アフには1段のステップが3基付属する。これらのステップには立石が立てられていた。ステップ左右からカメ骨片各1を検出した。主アフ上の立石は現在では不明。主アフ右側に小アフがあり、両者の間に小ボックス1基、小アフの右前面にステップ1基が付属する。小アフには4基の立石がある。ステップには右側の1基が現存するが本来は2基あった。主アフ左側には小ボックス3基が並ぶが、バックレストをもつ。ボックス内部を発掘した(第11図2)が遺物は皆無であった。さらに左側に平面正方形の小アフがある。構造は粗雑。前面に焼かれたカメ骨片5点、周囲から3点のカメ生骨を検出。この小アフの左前面に小形のボックス2基が付属する。右ボックス内よりカメ骨1点を検出。主アフ左前方には小形のアフが独立してある。立石なし。前面中央よりカメ骨片1点を検出した。コート中央と左にシャコガイ貝殻が堆積している。コート内には他の遺構はない。

・アカウタパパトゥアのマラエ・コンプレクスは次々と築造された4基のマラエが同一地にある、編年上貴重な遺跡である。当地でのマラエはA1からA4への順で築かれたといえる。A1からA3までは古いマラエの前面に新しいマラエを築いていくことによって連続性が考えられる。またA3とA4とのあいだには形態上の大きな差がみられ、両者の時間差を感じさせる。

A1は小形のアフが多く並列するものであるのに対し、A2、A3は主アフとその左右

の小アフ、ボックスの構成、さらにA 4は多数の付属施設をもつものであり、A 1とA 2、A 3、A 2・A 3とA 4の間に大きなギャップが存在するようである。

4. 分類と編年

レアオのマラエはエモリー氏によってレアオ型として共通した特徴をもつものとして一括されている。確かにアフ上に多くの立石を有すること、アフの高さが比較的高いことなどは共通する特徴といえる。また立地はほとんどが外洋に近いところである。しかしながら、前述のように形態を子細にみればレアオのマラエにも多様性がある。エモリー氏によってレアオ型の特徴とされたウォールにしても、あるものとないものがある。マラエの分類と編年については、ウォールの有無、アフと付属施設の単純なものから複雑なものへという、アカウタパパトゥアのコンプレクスで変遷をたどることができた編年の視点から次のようにまとめることができよう。

A類 ウォールのないもの。

A 0 小形のアフが横に複数並ぶ。

A 1 主アフのみ。付属施設はない。

A 2 主アフに付属してコート内に小プラットフォームがある。

A 3 主アフ側面に接続した小アフがある。

A 4 主アフの左右に小アフ、ボックスがある。

A 5 主アフの左右に小アフ、ボックスが付属し、前面にステップがある。

B類 ウォールをもつもの。

B 2 主アフ、コート内小プラットフォームがある。

B 3 主アフに接続した小アフがある。

B 4 主アフの左右に小アフ、ボックスがある。

B 5 主アフの左右に小アフ、ボックス、前面にステップがある。

B 6 ウォールがコート四周を囲繞するもの。

以上のようにウォールのないA類6種、ウォールのあるB類5種がある。マラエの構成体の複雑化はソサエティ諸島、ツアモツ諸島などのマラエ築造の中心地において変遷の基本である。したがって、レアオでもその大筋からはずれることはないであろう。アカウタパパトゥアのマラエ・コンプレクスにおいてはA 0→A 3→A 4→A 5という型式変化をたどっていることが実証されている。A 1、A 2は型式学的観点に立ては上記の位置づけをすることができよう。

A類とB類の関係については、ウォールの有無を別にすれば両者の型式変化は相応じたものがある。B類にはA 0、A 1類に対応する型式がみられない。逆にレアオにおいてはきわめて特異なB 6類が存在する。B 6類の位置づけについては主アフにステップのあること、小アフおよびコート内のプラットフォームの存在などB 5類と共通するところがあるが、その形態、構造はレアオの他のマラエと比較して奇異であり、別に考察したい。

以上のように、A類ではA 0類からA 5類へ、B類ではB 2類からB 5類へという型式編年を考えることができる。

ウォールをもつマラエとウォールのないマラエとがウォールを除けば型的に同じ変化をたどっていることは、両者が同一段階にあり、両者併存していたことを想定させる。すなわち、ウォールのあるマラエがウォールのないマラエからの発展型式ではないということである。A 2 類と型的に同一レベルにある B 2 類において初めてウォールが築かれることは、A 0、A 1 類とレアオにおいて初期のウォールのないマラエが築かれていくなから、ウォールが独自に生み出されていったのである。そして、それ以降、レアオではウォールの有るものと無いものとの 2 類のマラエが築かれていったのである。

ウォール築造の契機は何であったか。ウォールをもつマラエの立地とウォールのないマラエの立地とを比較検討するとき、前者は外洋のリーフに近いサンゴの大塊がごろごろした、まことに荒涼とした場所がほとんどなのに対して、後者の多くは外洋側ではあるが比較的平坦な砂地やサンゴ礫原といった場所である。また、ヘケティニのマラエを初めとして、ウォールの内外では地表の状態が全く異なる。つまり、コートはサンゴ大塊は全くなく、小粒の礫の庭となっているのに対し、ウォールの外は既述のようなサンゴ原であり、明らかにウォールはコート内のサンゴ塊を除去してコートの左右に盛り上げたものであることが判る。外洋側にマラエを築くことから儀礼の場であるコートを整えることが必要となり、そのときコート内のサンゴ塊をかたづけ整地を行なう。その結果、コートができ、以後意識的にウォール構築へと向ったと考えられよう。区画の意味とともに多分に機能的な意味をももっていたがために、その必要のない地ではウォールを築くこともなかったのである。砂地のアカウタパパトゥアはその例である。

レアオのマラエが築造された実年代については手がかりはない。1976 年の第 1 次調査のときにプハラのマラエの下層より得られた木炭による放射性炭素年代測定値²⁵⁾があるが、上限年代を与えるにすぎず、当面の問題にとって有効ではない。放射性炭素年代測定値には問題の多いことは周知のことであり、まして当地方では核実験が行なわれていることを思えば、その扱いには慎重な態度が必要である。資料の少ない現在、測定値をそのまま信じるにはちゅうちょするのである。レアオの考古学的資料の実年代は現在のところ、残念ながら確信をもっていえるものはない。近年の資料については、いくぶん分る部分もある。レアオのマラエ・A 0 類の構築年代は今のところ不明である。したがってレアオにおいてマラエが初めて築かれたときはいつであるかという最大の課題については闇の彼方にある。

4. レアオのマラエの系統

レアオのマラエが自生したことはありえない。ソサエティ諸島を中心として、マラエの築造が盛行した地域から、人々の移動とともにレアオに持ちこまれ、レアオ内部において独自の発展をとげていったと考えられる。最初期のマラエがどこから来たかについては、篠遠氏により、レアオの礁湖岸に築かれたマラエが、いわゆる西ツアモツ型であることから、より西方のツアモツ群島よりの移住とマラエ築造が想定されている²⁶⁾。その根拠はプカマルのマラエである。今回、筆者らの調査に際してインフォーマントの情報を収集したところによれば、プカマルのマラエは 50 年くらい前に魚のヤナや池を作るため、マラエの構造体を破壊して、その石材を使ったとの重要な事実が明かとなった²⁷⁾。破壊されて上部

構造を失ったマラエは、レアオ型であるのか、西ツアモツ型であるのか、その構造だけでは明らかにしえない。したがって、プカマルのマラエを保留し、別方面から考えねばならない。

レアオのマラエの最初型式はアカウタハパトゥアのA 1であり、レアオのA 0類である。小形のアフが横に複数並ぶものである。この型態のマラエは中部ツアモツのファンガタウ **Fangatau**, ファカヒナ **Fakahina** の両環礁に特徴的なマラエである。レアオのマラエの系統はこの地域にあったことが想定できる。この後、レアオ内部において、前記した変遷を経て各種のマラエが構築されるようになった。

ところで、カیفアンガのマラエは別のルートを想定しなければならない。カンフアンガ **No. 14** は四方をウォールで囲み、主アフの構造がスラブで方形に囲むとともに上面をも覆う、レアオにおいては極めて特異なものであり、その源流はレアオ外に求めねばならないであろう。この種のマラエにもっとも近いものは、西ツアモツ、およびクック諸島にみられるタイプのマラエである。西ツアモツにおいては、ランギロア **Rangiroa** のポマリオリオ **Pomariorio**, ティヴァル **Tivaru**, マエヘレホナエ **Maeherehona** の各マラエが、いずれもコート四方をウォールで囲んだものであり、主アフに対面するウォールの中央部が切れた形態をなすものである²⁸⁾。タカロア **Takaroa** ではマヒナ・イ・テ・アタ **Mahina-i-te-ata** を主とし、西ツアモツ型の主アフと、それから伸びる、コート四周を囲んだウォールがあり、主アフに対面するウォール中央が切れており、その前に小プラットフォームあるいはバックレストがある。また、コート内のウォール沿いに立石が立てられていることなど、カیفアンガの例に類似する点が多い²⁹⁾。タカポトにおいては、タマティエ **Tamatie** のマラエがやはり同様の形態をなしたマラエであり³⁰⁾。以上の3島の四周をウォールで囲んだマラエは共通した形態上の特徴をもち、きわめて強い相互関係を有していたことが想定できる。また、クック諸島のトングレヴァでは、若干の差異はあるものの、主アフの左右から伸びるウォール状にコート四周を囲む石列と、それに沿って並ぶ立石群をもつマラエがある。このマラエ・トレインガ **Te Reiga**³¹⁾ も西ツアモツに分布する同種マラエの一環に属するものと考えてよいだろう。

以上のように、カیفアンガ **Nn. 14** のマラエに類するものは、西ツアモツおよびクック諸島北部に限られており、これらの地域からの移住に伴う伝播と考えられる。

この型式のマラエが伝播したのはいつか。ガランジェ氏はランギロアのこの種のマラエはタヒチの「沿岸型マラエ」の影響をうけて築かれ初めたとしており、その根拠としてマラエを構築している石材の性質、形、大きさがタヒチの「沿岸型マラエ」のそれと全く同じであることをあげている³²⁾。この種のマラエの実年代はタヒチの例から18世紀以降と位置づけることができるのである。したがって、レアオの例も18世紀以降とされよう。

カیفアンガに存在する西ツアモツ、クック諸島北部とのつながりを示すマラエは、レアオ島に18世紀以降、諸方面からの移住のあったことを想定させるものである。

レアオのマラエの系統を考えるさい、中部ツアモツ方面よりの移住と、それに遅れる西ツアモツ、クック諸島北部方面よりの移住の少なくとも二度にわたる移住の波を想定しなければならないであろう。

5. マラエの儀礼

ポリネシアの宗教儀礼についてはエモリー³³⁾、ギアール氏³⁴⁾等の著作に詳しいので、ここで述べるのは重複する点もある。また記録に残されたものも多い。ここではレアオのマラエの調査で考古学的に明らかにされたことからについて触れる。

レアオのマラエの儀礼を考えるうえで重要なことは、カメの骨格がマラエの内から検出されたことである。アカウタパパトゥアでは4つのマラエのすべてから、カメ骨片が発見されており、とりわけA3のコート内ブラットフォームの周囲に頭骨と脊椎骨、左ボックス内から四肢骨、胸骨という部位による納める場所の区分がなされていることが注意される。ヒティアンガテアタとテヒアロでは小ボックス内にカメ骨が納められていた。

このようなカメ骨がマラエから出土する例はレアオに限らずツアモツ群島に広く存在しており、ポリネシアに共通する現象である。

エモリー氏の引くモンティトン氏の見聞記にマラエの祭祀のさいちゅうに司祭者がコート中央でウミガメの頭を贈られることがみえている。バイロン氏の1765年、タカロアでバスケットで囲んだ中に大量のカメの頭骨や魚骨があったのを見ているし、1870年、ナプカにおいて、フィレン氏がマラエに向う道の本陰でカメの頭骨を含む骨をみている。また、ファンガタウのマラエ・ラマポヒア **Ramapohia** ではアフの西に多数のカメ骨があった。

カメはレアオに限らずどこでも大量に捕獲し、食べられた。また、産卵のため海から陸に帰ってくる。住民にとっての望ましい食料源であったことが根底にあり、定期的に帰って来るというカメのもつ習性が、神からの贈り物という観念を育てたのであろう。そのように理解するとき、ラマポヒアのマラエで行なわれた祭祀において、その年に捕獲した最初のカメの胸骨をマラエの祭壇に献げたとのインフォーマントの言が正しく理解できる。さらに、発見されたカメ骨には焼かれたものがあり、また頭骨と脊椎骨が連なっているのを除けば、破片であることから、これらは食べがらと考えられ、マラエでのカメ共食を行なったのであろう。ここでみられるのは、カメを用いた、あたかも神送りの祭祀の一景である。

カメのほかにレアオのマラエで注意されるのは、シャコガイ貝殻の堆積があることである。現在、礁湖には大量のシャコガイが棲息し、またトケラウ側の礁湖岸にはシャコガイ貝塚が延々と連なっていて、昔から大量に捕食されていたことがわかる。この貝をもカメと同様に共食、奉獻していったらしい。

マラエの祭祀は基本的には祖先崇拜であるが、同時に食料資源豊饒を願う神送りの神事の機能をも合せもっていたのである。

マラエの祭祀で見落せないのが人身供儀である。ポリネシアの人身供儀、食人について書かれたものは枚挙に暇がない。レアオでは人身供儀のあったことを示す考古学的証拠はほとんどない。唯一、テアパイではアフの左側1.5 mの地表に小片に破碎された焼かれた人骨2体が散乱し、その骨片中にサメ歯1本が置かれ、その上面を1枚のスラブが覆っていた。下顎骨、脊椎骨、胸骨、四肢骨等が散乱しており、また、サメ歯は焼けておらず、奉獻品として置いたらしく、単なる埋葬ではないのは明瞭である。人身供儀のうちに入れ

て考えられよう。この種の例は、西ツアモツのタカロアにおいて、筆者が調査したマラエ・ランギハアオのコートでも確認している。考古学上の証拠は限られてはいるが、テアバイの例にみるように、レオオでも人身供儀は他と同じく行なわれていたのであろう。

6. マラエとセトゥルメント・パターン

レオオのマラエ分布は第2図にみるとおりである。タブアラヴァ付近、ガケ、およびケレテキに多く、トケラウに疎であることが看取できる。分布密度と時間的変遷とを考慮すると、初期にはガケおよびケレテキにあったものが、時代が下るにつれ、マラエ分布が拡散し、トケラウも含めて広がっていく傾向がみられる。マラエ分布については、住民の定住地との関係がもっとも重要であろう。今回の調査では居住址の調査も最重点項目のひとつであったが、トケラウ側では居住痕跡はきわめて乏しい状態であった。若干の調理場址が検出された程度であり、トケラウ側において積極的定住生活が営まれていたとは考え難い。それに対して、ガケ、タブアラヴァに隣接するモヒトゥ、モツのプカマルなどにおいては、タロ栽培の跡であるカウアイ址が存在する。なかでも、ガケとモヒトゥのカウアイは極めて大規模であり、タロを基盤とした長期にわたる定住生活をうかがわせるものがある。筆者の調査したパゴア Pagoa 遺跡ではカウアイ群中の遺跡であるが、多くの食料残渣とともに貝製アツズ製作を示す遺物も出土しており、カウアイによる農耕のもつ意義の無視しえなかったことを示すようである。トケラウ側では、それに比べてカウアイ掘削に適する平坦地や広い土地は少なく、農耕には不向きであり、また重要な食料源であるシャコガイは採取地が定期的に移動させられる共同規制があって漁撈の面でも制的があり、定住的生活を営むには種々の制約のあった土地である。それに対し、ケレテキ側は、小モツとはいえ、一部の大形モツではカウアイも掘削されてタロ栽培が行なわれており、外洋とを結ぶ浅いクリークがあることもあって魚類が豊富であり、漁撈の面でも安定した食生活が保証されていた。このような島内の生態的要因を考えると、マラエと食資源の安定にもとづく定住とが密接な関係をもっていることが推定できるのである。

安定した場所から徐々に拡大していく過程に応じて、マラエもそれらの小集団に伴ない島内全域に構築されるようになっていったのである。そのようななかで、自己の集団のアイデンティティを示すものとして、タブアラヴァの周辺にみられるマラエの方向性の独自性が考えられよう。

マラエのもつ社会的意味はマラエだけでは明らかにすることはできない。カウアイ、居住址、漁撈（魚漁と貝採取を含めて）の場をも合せたライフ・サイクルの視点から考えていく必要があろう。

注

- 1) レオオの歴史的背景、現状等については、畑中幸子 1980 に詳しく述べられている。
- 2) 1980 年 7 月 23 日から 10 月 11 日までのレオオ滞在中、民間船は 8 月末に 1 度来航し

たのみであった。

- 3) 今回の調査は畑中幸子・金沢大学教授を代表者とする文部省科学研究費補助金による海外学術調査「東ツアモツ群島へのポリネシア人の移住に関する研究」による。1980年6月18日－10月19日、フランス領ポリネシア、レアオ島を主調査地とする文化人類学、心理学、言語学、自然人類学、考古学の総合調査である。考古学班は日本から筆者が、フランスからジョゼ・ガランジェ José Garanger パリ大学教授、ジャン＝ミシェル・シャジーヌ Jean-Michel Chazine タヒチ博物館考古学部長が加わり、現地には筆者とシャジーヌ氏の2人が赴いた。7月1日－18日を西ツアモツのタカポト、タカロア両島の調査を考古学班のみで行なった。レアオでは7月23日－10月11日を筆者が調査した。調査の全般については、新田 1980, 1981 に記した。
- 4) Emory 1933, 1934, 1970
Green 1960
Green ほか 1967
Garanger 1979
- 5) 石造構築物があるが、その多くは住居の舗石と考えられ、マラエではないかもしれない。
- 6) Emory 1970
- 7) Green 1960, Green ほか 1967
- 8) これらのうち8地区、9マラエは確認できなかった。その他は踏査を行なった。
- 9) Emory 1934, pp. 65-76
- 10) Sinoto 1978, Table 3
- 11) 調査報告書は、Emory 1934, Sinoto 1978, および、シャジーヌ氏のタヒチ当局提出のレポート（タイプ原稿）がある。
- 12) ヒティアナウナウのマラエのアフの構築法はレアオのマラエのほとんどすべてに共通する。すなわち、最下段のみスラブを立てて並べて長方形の囲みを作り、さらに、その上部の外壁部のみをスラブ平積みによって高くし、内部にはサンゴ塊、サンゴ礫をつめアフ最上部には粒の細かなサンゴ礫を敷きつめて整えている。外観状は美しく整えられている。特に記さないかぎり、以上のような構築法によっているものと理解されたい。
- 13) -g- の表記であるが発音上は〔ŋ〕と発音される。
- 14) Emory 1934, p. 71, Fig. 63.
- 15) Emory 1934, Fig. 64
- 16) Sinoto 1978, Fig. 5
- 17) Emory 1934, Fig. 65
- 18) Emory 1934, p. 72, Fig. 66
- 19) Sinoto 1978, pp. 125-129. Fig. 12, 13
- 20) Centre d'Expérimentation du Pacifique, フランス南太平洋核実験センター。レアオには気象観測隊が駐屯している。
- 21) ariki 首長, kaito 戦士。ポリネシアの支配層。タイホブはタタコトとの戦争を指揮し

た人物である。他の1人はマヒティ **Mahiti** で、タイホプより年長で戦争には参加しなかった。

22) Sinoto 1978, pp. 123-125, Fig. 11

23) 1980年7月31日ー8月22日の期間。筆者が調査を担当。伐採はこれより数日前から行なった。

24) 1980年7月2日ー17日、西ツアモツのタカロアをシャジーヌ氏と2人で調査した。7月1日、17ー18日、同じくタカポトを調査。タカロアのマラエ・ランギハアオのコートにおいて、破碎人骨、歯、真珠貝製釣針等が発見された。新田 1981 を参照。

25) No. 39 の下層 AD. 1080 \pm 80, No. 40 の下層 AD. 1580 \pm 65

26) Sinoto 1978, pp. 168-169

27) Nakunua および Maretiale による。

28) Garanger, José et Anne Lavondés 1966

29) Emory, K. P. 1934, Figure 16. このマラエは筆者も1980年7月16日に調査を行なった。

30) Chazine, Jean-Michel 1977, Fig. 4. 1980年7月17日に筆者も調査を行なった。

31) Emory, K. P. 1970, p. 80, Figure 8

32) Garangr, J. 1966, p. 61

33) Emory, K. P. 1947

34) Guiart, J. 1962

文 献

新田栄治, 1980, 仏領ポリネシア, ツアモツ群島の考古学調査

「鹿児島大学南科研資料センター報告」No. 26, pp. 91-92

新田栄治, 1981, 環礁の考古学。「考古学ジャーナル」No. 194, pp. 32-36

畑中幸子, 1980, レアオ島とチャント (**Chant**) 蒲生正男・下田直春・山口昌男編『歴史的文化像』pp. 283-310, 東京

Chazine, Jean-Michel 1977, Prospections archéologiques à Takapoto. Journal de la Société des Océanistes, No. 56-57, pp. 191-215

Emory, Kenneth P. 1933, Stone Remains in the Society Islands. B. P. Bishop Museum Bulletin, No. 116

Emory, Kenneth P. 1934, Tuamotuan Stone Structures. B. P. Bishop Museum Bulletin, No. 118

Emory, Kenneth P. 1947, Tuamotuan Religious Structures and Ceremomies. B. P. Bishop Museum Bulletin, No. 191

Emory, Kenneth P. 1970, A Re-examination of East Polynesian Marae : Many Marae Later. R. C. Green and M. Kelly (eds.) "Studies in Oceanic

- Culture History" Vol. 1, Pacific Anthropological Records 11, pp. 73-92
- Garanger, José 1966, Fouilles archéologiques et restauration de trois marae.
- J. Garanger et A. Lavondés "Recherches archéologiques à Rangiroa, archipel des Tuamotu" Journal de la Société des Océanistes, Vol. 22, pp. 45-65
- Garanger, José 1979, Pierres et rites sacrés de Tahiti. Dossier Tahitiens 2, Paris.
- Garanger, José et Anne Lavondés 1966, Recherches archéologiques à Rangiroa, archipel des Tuamotu. Journal de la Société des Océanistes, Vol. 22, pp. 25-66
- Green, Roger C. 1960, Moorean Archaeology : A Preliminary Report. Man, No. 200, pp. 169-173
- Green, Roger C., K. Green, R. A. Rappaport, A. Rappaport and J. Davidson 1976, Archaeology on the Island of Mo'orea, French Polynesia. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History, LI-2
- Guiart, Jean 1962, Les religion de l'Océanie. Paris.
- Sinoto, Y. H. 1978, Preliminary Report of Archaeological Survey on Reao Atoll, Tuamotu Archipelago, French Polynesia. The University of Kanazawa, 1976, Polynesia Scientific Expedition "A Study of the Polynesian Migration to the Eastern Tuamotus", pp. 102-181, Kanazawa

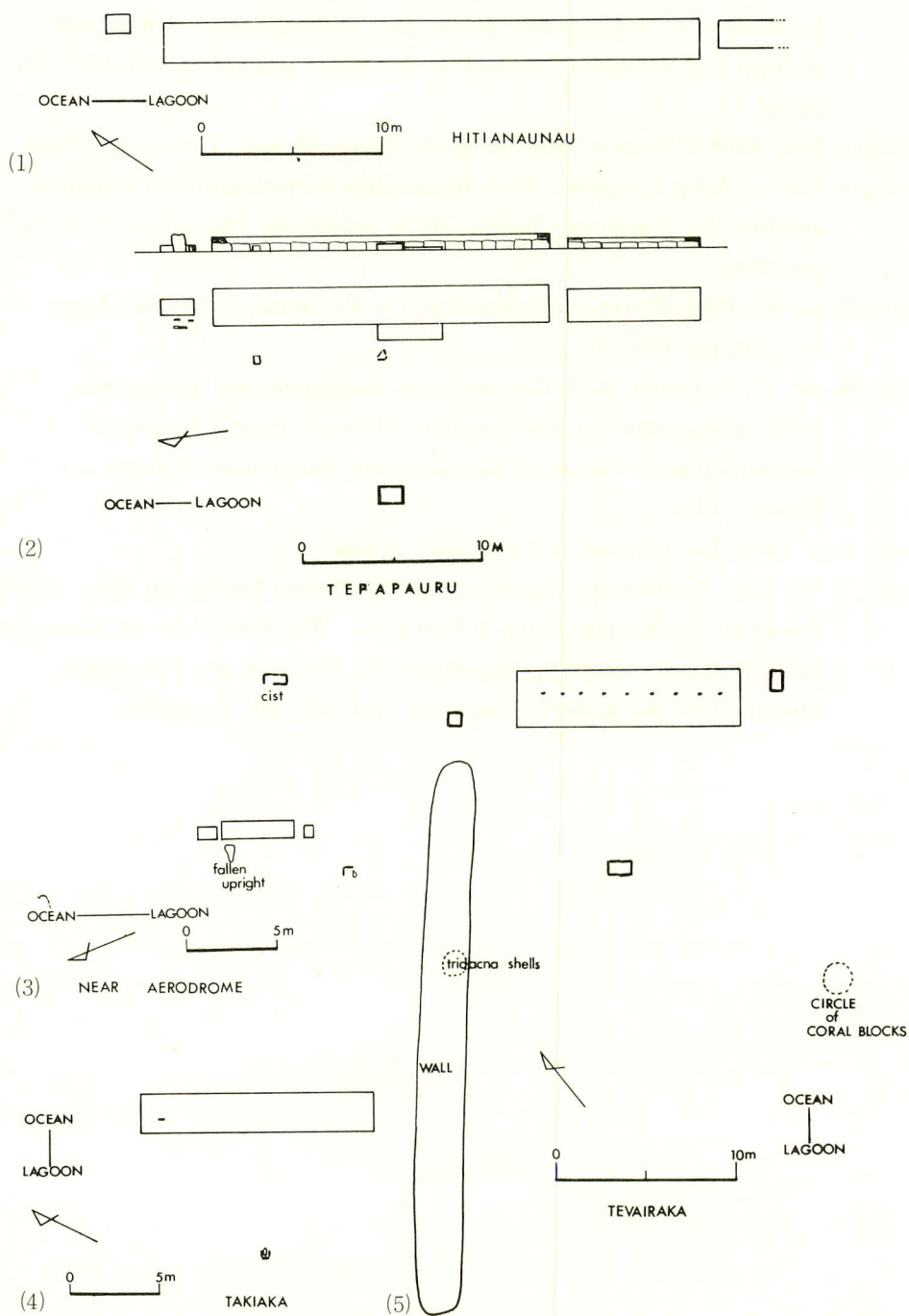


Fig. 3. Marae on Reao

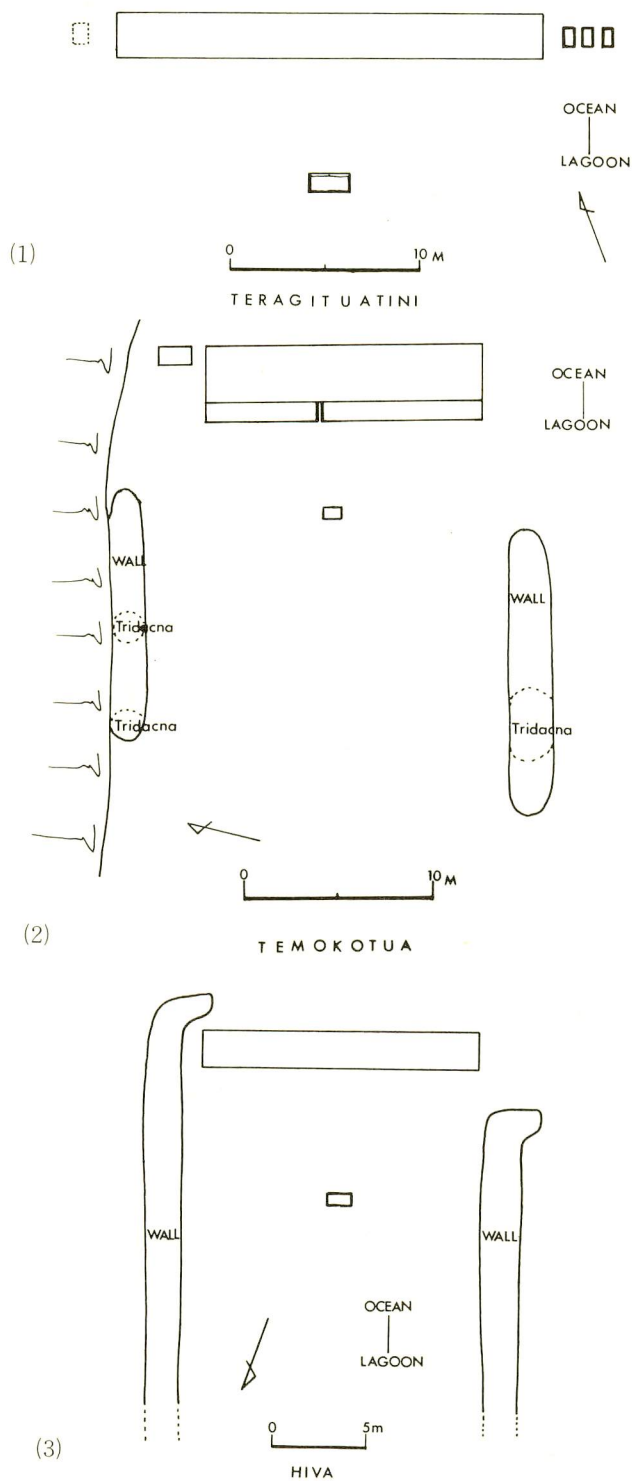


Fig. 4. Marae on Reao

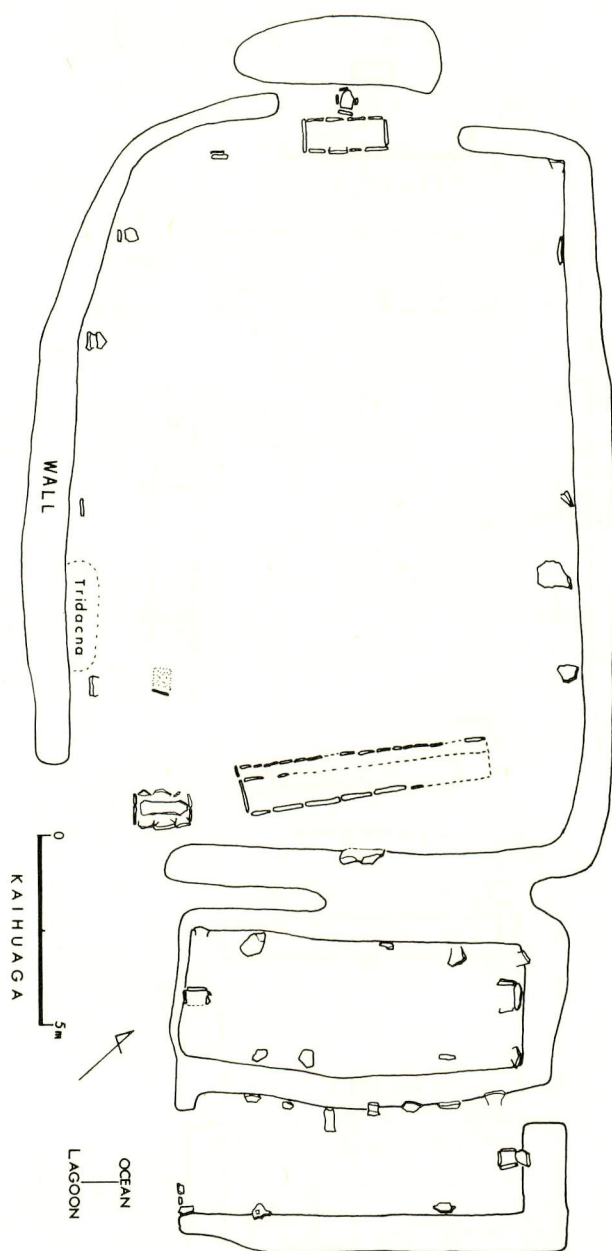


Fig. 5. Marae on Reao (No. 14)

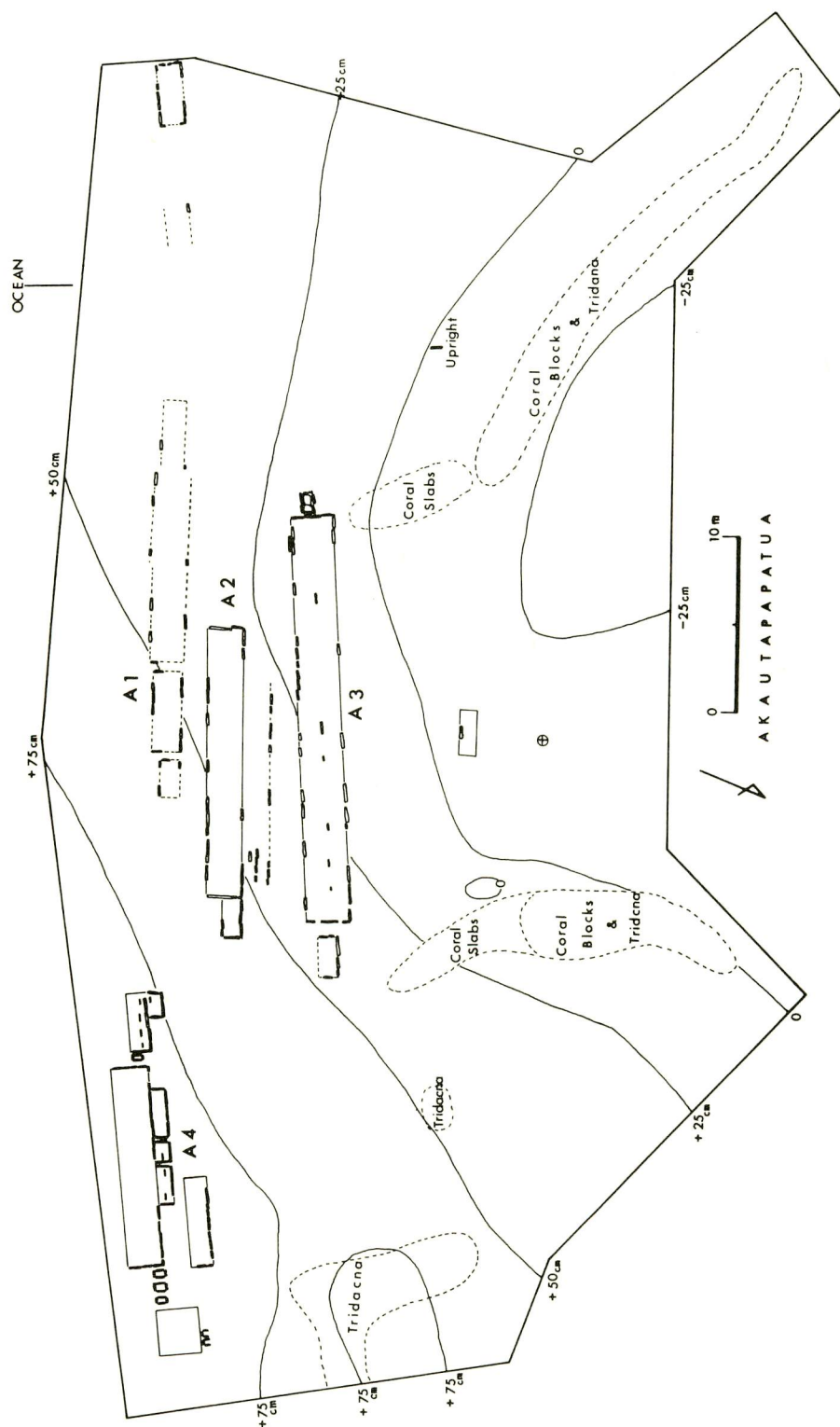


Fig. 6. Marae Complex at Akautapapatua

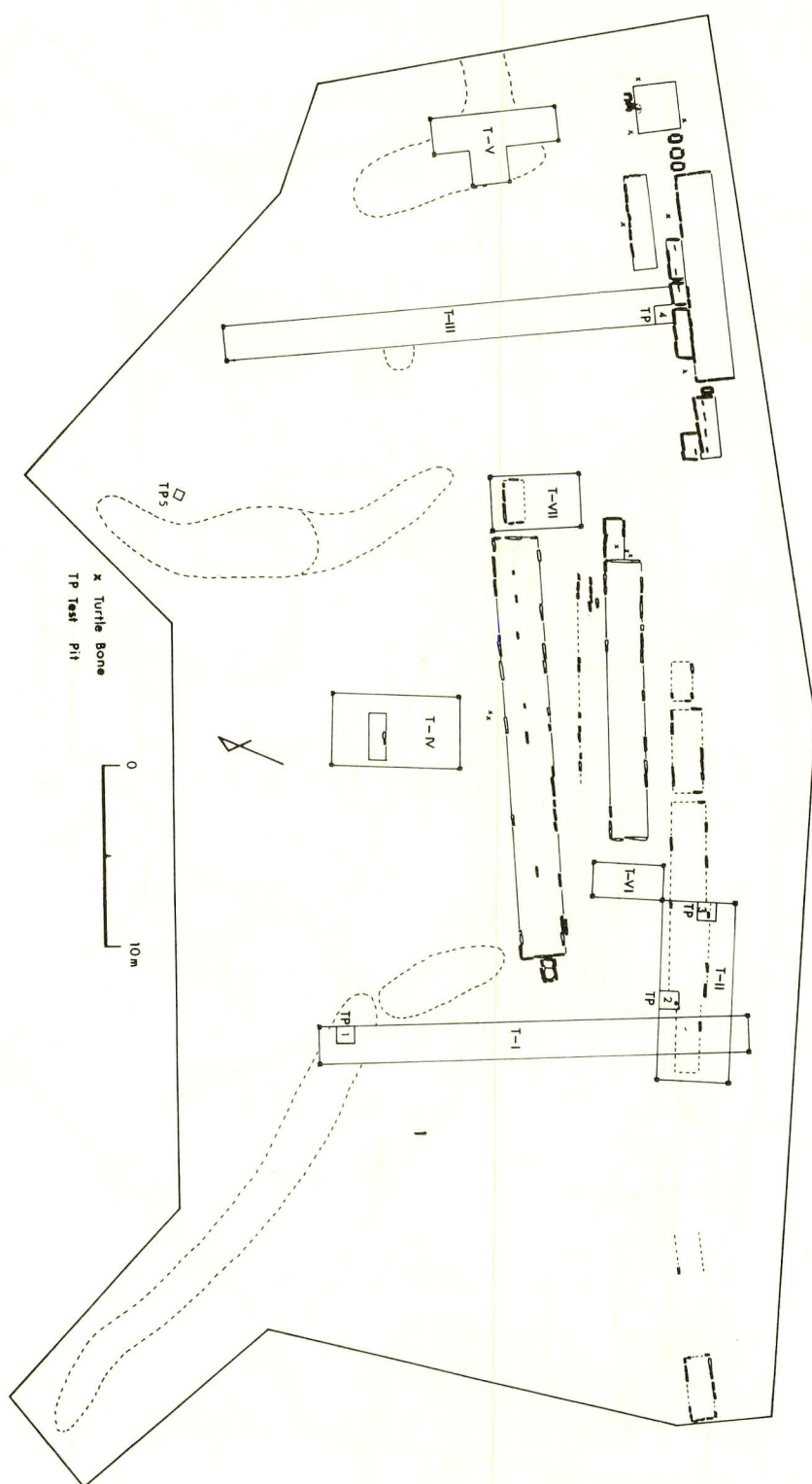


Fig. 7. Arrangement of the Trenches at Akautapapatua

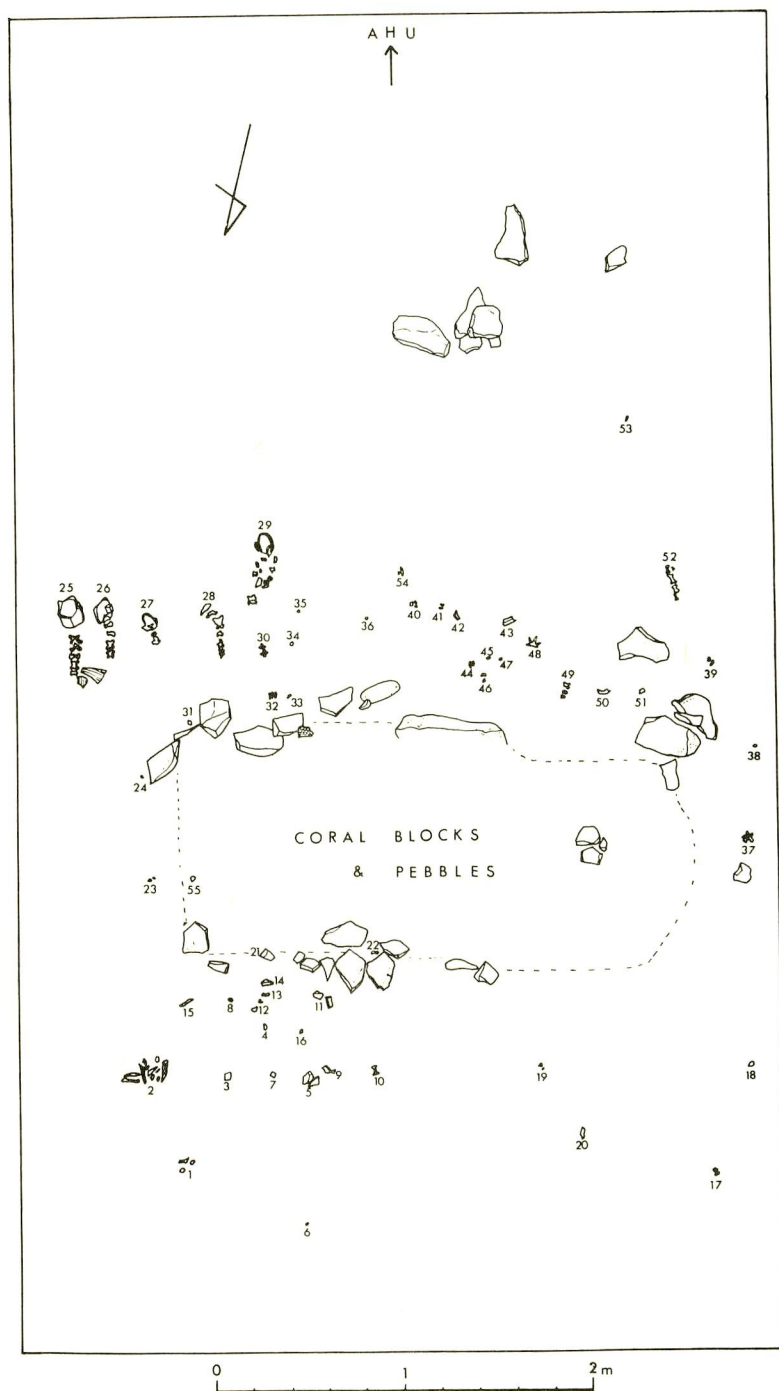


Fig. 8. Plan of Trench IV after the Excavation



Fig. 9. Plan of Trench V after the Excavation and the Stratigraphy of the East Wall

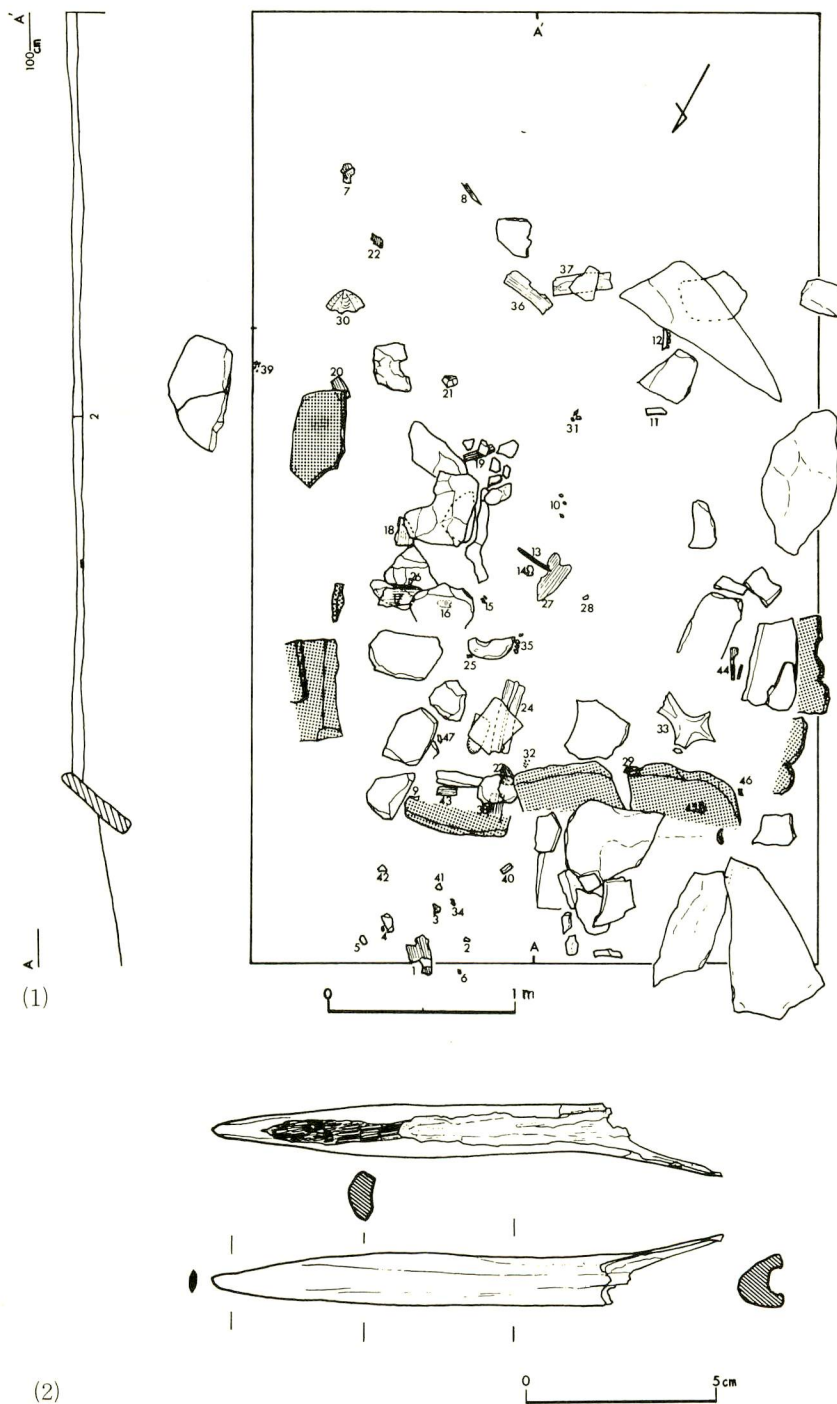


Fig. 10. (1) Plan of Trench VII after the Excavation and the Stratigraphy of the Center Line.
(2) Harpoon found in the Box

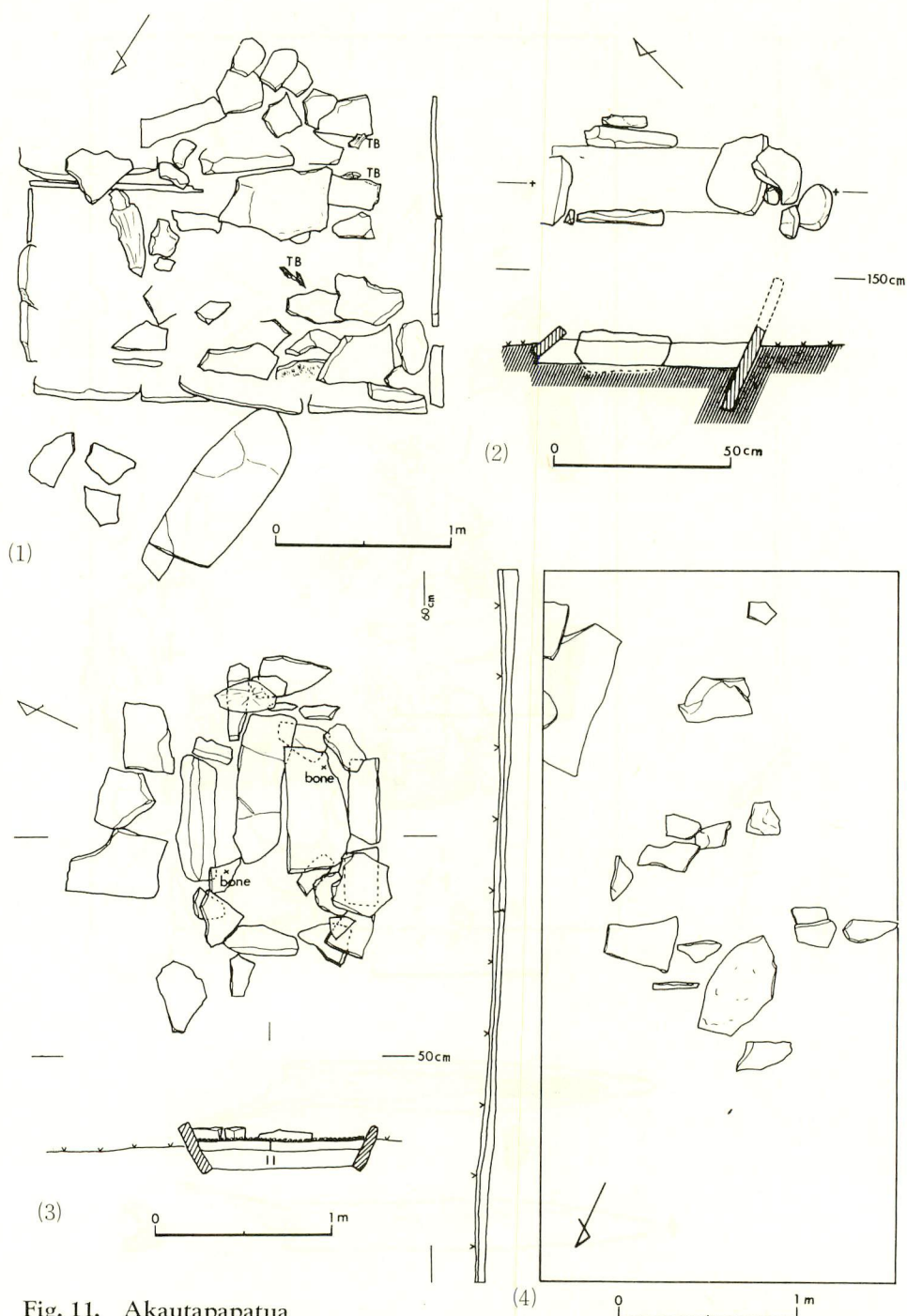


Fig. 11. Akautapapatua

- (1) Left Box of A-3 (2) Right Box of the Left Three ones of A-4
 (3) Right Box of A-3
 (4) Plan of Trench VI after the Excavation and the Stratigraphy
 of the East Wall.

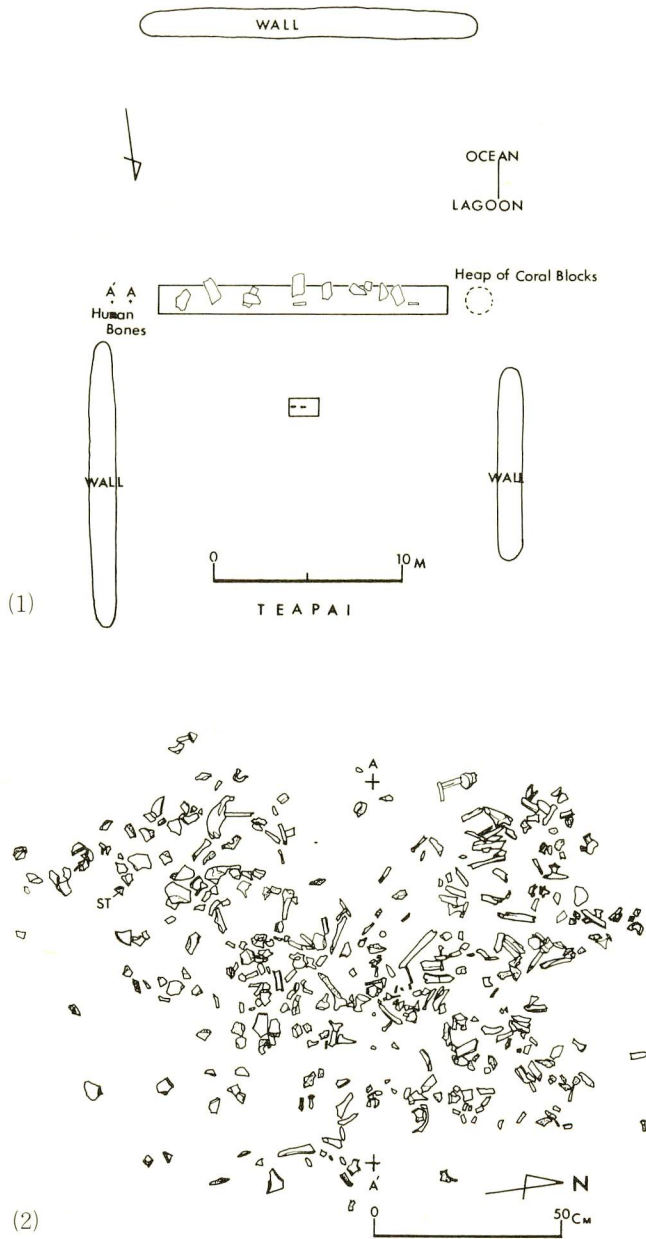


Fig. 12. (1) Marae Teapai (No. 33)

(2) Burnt and Crushed Bones by the Ahu of Marae Teapai in situ.

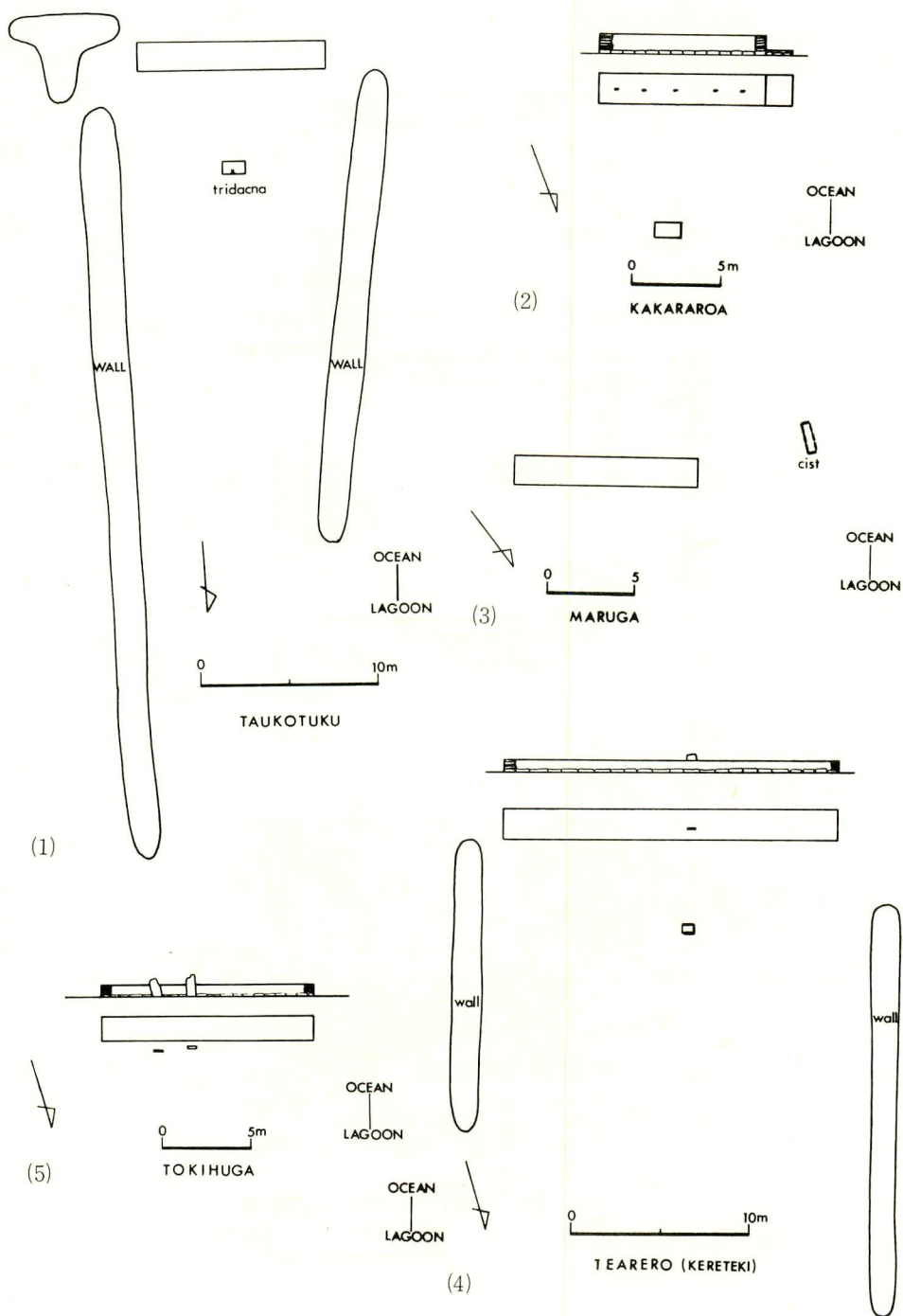


Fig. 13. Marae on Reao

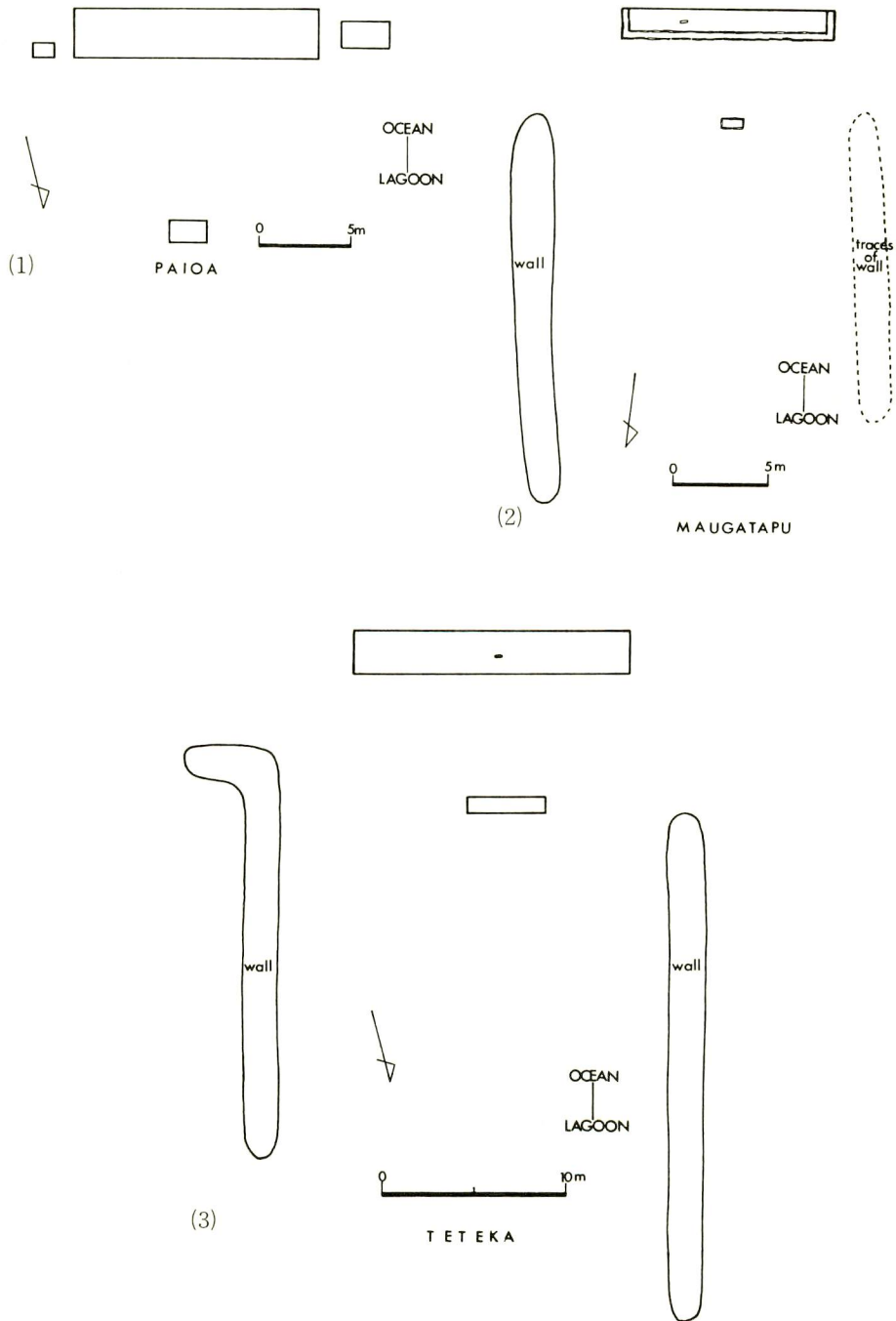


Fig. 14. Marae on Reao

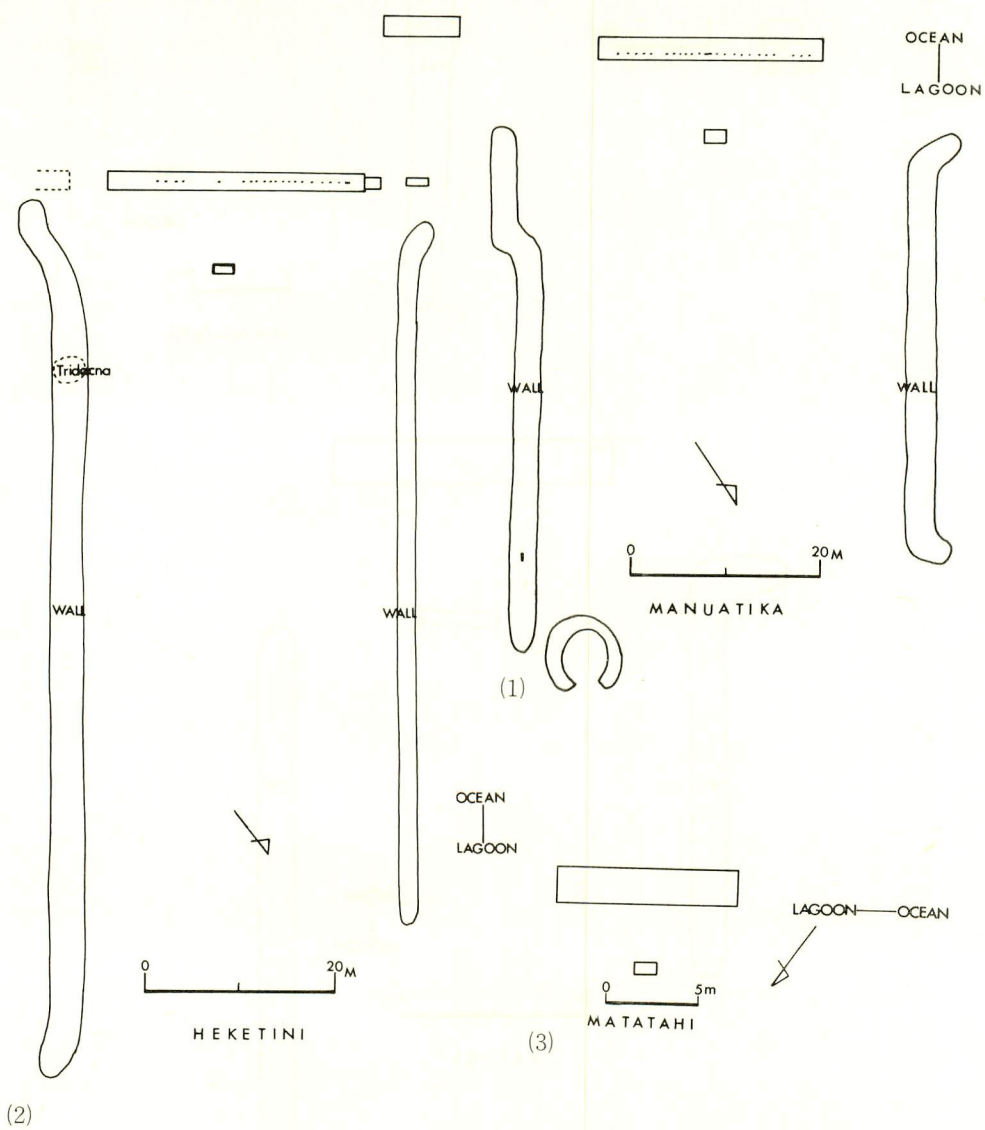


Fig. 15. Marae on Reao



(1) Marae Tohoranui



PL. 1.

(2) Marae Hitiagateata



(1) Marae Puraautoga



PL. 2.

(2) Marae Kaihuaga (No. 13)



(1) Marae Kaihuaga (No. 14)



(2) Marae Kaihuaga (No. 15)



(1) Panoramic View of Marae Complex at Akautapapatua
before the Excavation



PL. 4. (2) Marae Akautapapatua (A-2, A-3, A-4) after the Excavation



(1) Turtle Skulls and Backbones in situ in Trench IV at
Marae Akautapapatua



PL. 5.

(2) A Harpoon in Trench VII in situ



(1) Marae Pukamaru (No. 28)

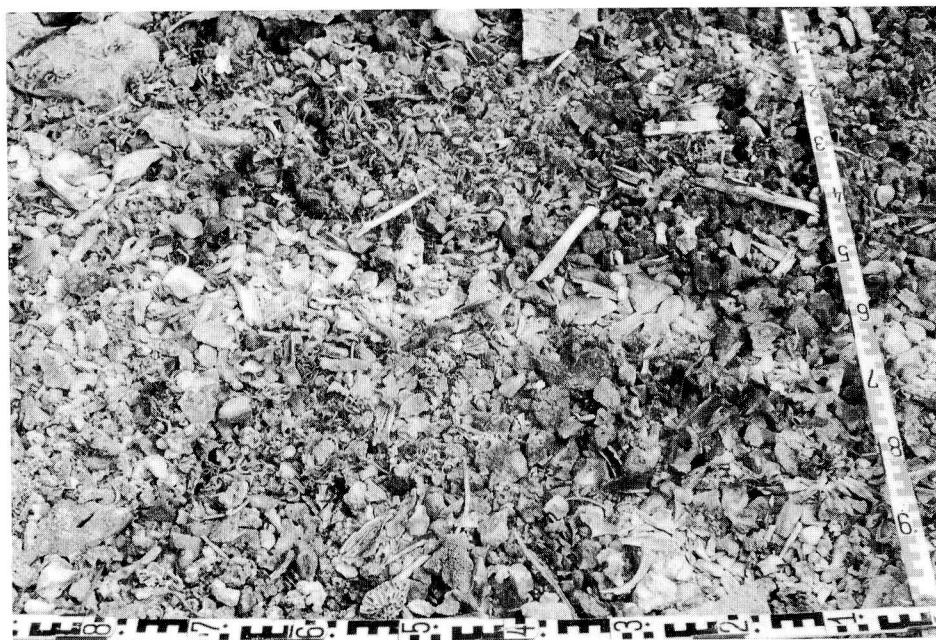


PL. 6.

(2) Marae Pukamaru (No. 30)



(1) Marae Teapai



PL. 7. (2) Burnt and Crushed Human Bones by the Ahu
of Marae Teapai in situ



(1) Details of the Front of the Ahu of Marae Kakararoa





(1) Small Ahu at Tepariga

